つゆを大海にあつらえ、ちりを大地にうづむとをもへ

≪日蓮大聖人の説示される【成仏の姿】とは、どういうものなのか≫

廣 田 頼 道

釈迦如来が説いた八万四千の膨大な仏教経典は、何を目的に説かれたのかと言えば、【一切衆生平等成仏】であります。一切衆生（人間、動物、植物、鉱物、光、水、等々ありとあらゆる生命存在）どんな生命でも仏に成る事が出来る法を究極の目的にして広大な山裾に当たる権経、方便の教えから、徐々にせり上がりながら頂上へ、成仏不可能と言われていた、二乗、悪人、女人、一闡提の成仏を一つ一つ理論的に超克し、山裾から頂上へ、平地、大地を含む完全な【一切衆生平等成仏の十界互具、即身成仏の法】を、頂上の【法華経】に解き明かしたのであります。世の中の、法華経以外の経典を依り所とする各宗各派は、荒唐無稽な、方便誘引の教えを現実と錯覚させて、天国、極楽浄土、仏国が現実に存在すると信じ込み、人々に強引にマインドコントロールで思い込ませているのであります。日蓮大聖人の説示の中にも、御信者に対して、死別の哀しみを乗り越え励ます為と、信心深化の為の方便誘引の表現がありますが、その奥に、究極の【霊山浄土】【成仏の姿】とは何なのかを示しているのであります。

この事を明らかにする為に、妙法蓮華経の法に順じた【成仏の姿】を明らかにしなければならないと思い、この一文を書いた次第であります。私達は、【成仏】の為に信仰しているのであります。【成仏】の為に、この世に生まれて来たのであります。【成仏】に真剣に向き合い【成仏の姿】とは何かを正しく知らなければいけないのであります。僧侶も御信者さんも、不信仰者も、この世に生まれて来た人は、信仰の目的である【成仏の姿】を、溺れる者は藁をもつかむで、権経、方便経の極楽、仏国、天国等々の姿幻影を真実と信じ、迷いすがり付く事が無い様に、法華経の中に示される、【一切衆生平等成仏】が説かれる、方便誘引の法が何か、本当の【成仏の姿】が何かを、しっかり心に立て分け、刻んで信仰していかなければいけないはずであります。

【上野殿御返事】（全1561p）

去年去去年の疫病に死にし人人の数にも入らず、又当時蒙古の攻めに免かるべしともみへず、とにかくに死は一定なり、其の時の歎きは当時のごとし、同じくは仮にも法華経の故に命をすてよ、露を大海にあつらへ塵を大地に埋むとをもへ、法華経の第三に云く「願くは此

の功徳を以て普く一切に及ぼし我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」云云恐恐謹言

十一月六日　　日　蓮　花押

上野賢人殿御返事

此れは熱原の事のありがたさに申す御返事なり。

当御書は、弘安2年11月6日付けで、南条時光殿に与えられた御手紙であります。最後の追伸で分かるように、一連の熱原法難に対して、南条時光が、日興上人と呼応しながら昼夜を分かたず奔走された事に対する感謝の気持ちを示されたものであります。熱原法難に於ける、熱原農民の代表と判断された三人の平左衛門尉頼綱による、幕府による正式な裁きも無く、私刑（リンチ）といえる惨殺処刑が実行されたのは、10月15日でありますから、徹頭徹尾、理不尽な熱原の法難は、冤罪の声も届かないまま無理矢理に死をもって幕を閉じられてしまった訳であります。誰もが釈然としない澱の様にこびり着いた怒りと悲しみを抱えたままの思いに対して、送られたのが、この御手紙であります。宛名の【上野賢人】の【賢】の所は【殿】の上から重ね書きし【賢】にされている点も、

【白米一俵御書】弘安2年（全1596ｐ）

「されば いにしへの聖人賢人と申すは、命を仏にまいらせて仏にはなり候なり。」

の御文に共通して。日蓮大聖人の南条時光に対する法華経の行者として尊敬の念を表した特異な点であります。御書冒頭は、竜門の滝をのぼる大半の鮒が、遡上出来ずに、漁師に捕らえられたり、力尽き果て死んでしまう事を譬えにし、成仏を遂げる事の難しさを示される。二段目には、卑しき者と侮蔑されている武士が、手柄を挙げ昇殿を許されるまでになるには、竜門の鮒と同じ様に並み大抵の事では叶わないと示され、三段目には、【法説周】であり、法華経対告衆の代表者である舎利弗でさえ、釈尊が亡くなる事を聞き、余りにも悲しく、現実を受け入れ難く、葬送に参列して見送る事など想う事も出来ないと考え、信心修行を捨て、釈尊に先んじて自害してしまうのであります。そして、大通智勝仏結縁の三千塵点劫に縁せし者も、五百塵点劫に縁せし者も、法を悟る迄の道の険しさに、信心修行を捨て、成仏出来ずして、六道輪廻から解脱出来ない者が殆どであると、成仏稀有を示され。その上で、我等も決して、他人事ではない、同じ様に、試されているのである。本当に成仏の大願を起こして信心修行に専念しなければいけない。去年、一昨年の疫病流行による夥しい死者、又蒙古の攻めによって殺されるかもしれない現実。決して他人事ではない。

そして、冒頭引用した箇所の御文に繋がります。

とにかく、誰もが死ぬことは必定の事実であります。そうなった時の、自他の歎きは、疫病で儚くバタバタと死んで行くのと同じであります。同じ死ぬのであるならば、法華経の為に命を捨てなさい。

【露を大海にあつらへ塵を大地に埋むとをもへ】

この表現以外の諸御書の譬えば、

【佐渡御勘気抄】（全891p）

仏に成る道は必ず身命をすつるほどの事ありてこそ仏になり候らめとをしはかるる

【松野殿御返事】（全1384p）

魚の子は多けれども魚となるは少なく、菴羅樹の花は多く咲けども菓になるは少なし、人も又此の如し菩提心を発す人は多けれども退せずして実の道に入る者は少し、すべて凡夫の菩提心は多く悪縁にたぼらかされて事に触れて移りやすきもの也、鎧を着たるつわものは多けれども戦に恐れをなさざるは少し。

これ等の諸御書の様に、成仏する事が稀有であるという事と、身軽法重の説示が、信徒に対する定型的な表現でありますが、この【上野殿御返事】は、特異な、

【露を大海にあつらへ塵を大地に埋むとをもへ、法華経の第三（化城喩品）に云く「願くば此の功徳を以て普く一切に及ぼし我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」云云、恐恐謹言。】の表現がなされているのであります。妙法蓮華経の功徳によって、師弟共に【師弟一箇】して、成仏する事が出来るのであります。

【露】は、朝露の様な儚さという意味だけではなく、熱原農民に連なる、南条時光はじめ、我々法華経の行者の稀有な各々の尊い一滴一滴の生命という意味であります。

【大海にあつらへ】の、【大海】は、三千大千世界、森羅万象の全ての生命が繋がり一体となった永遠常住、無量無辺（有限の面積体積に限定されない無限）の総体を表現しています。全ての過去・現在・未来の生命は、この大海を故郷として、因縁によって、地水火風空の五大が整合した一滴の生命として掬われ、この娑婆世界に生まれて来るのであります。しかし、生まれてみると、有始有終、自己所有の生命と錯覚し、自我にさいなまれ、生老病に翻弄された人生を歩み、死を迎え、地水火風空の整合が解け、大海という故郷に溶け込み帰って行くのであります。

あいうえおの五十音の組み合わせを変える事によって、小説。論文、手紙等々の、一人一人の心、考えを伝える文章が、一つとして同じものが無く、無限に紡ぎ出されて行く事や、ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドの8音の組み合わせを変える事によって、無限に楽曲が

産み出されて行くのと同じなのであります。

【あつらへ】は、【誂え】の、ぴったりと納まるべき所に納まる事を表現しています。これは【帰る】べき所、【帰着】【回帰】【皆帰】という意味にもなります。この全ての生命の地水火風空が因縁によって混然と繋がった【大海】は、当然始まりも終わりも無く、永遠常住、無始無終の存在なのであります。

御書の中に、もう一点、【富木殿御返事】（全968p）文永12年2月5日54歳

露を大海によせ土を大地に加るがごとし生生に失せじ世世に朽ちざらむかし

（露が大海に戻り、土が大地に戻り加っても、生きている間に積まれた、この妙法蓮華経の功徳は幾度生れ変わっても無くならない朽ちないのであります。）

この様に説示されています。つまり、身延入山当初から、同じ成仏観が一貫して定まっていた事が良く分かるのであります。

この【富木殿御返事】の説示からすると、

一滴の露、一塵の芥子粒の様な生命が、与えられた短い生涯の中で、一切衆生平等成仏の法である妙法蓮華経の法に縁し、信じ、修行し、学び、伝えた、その功徳は、大海、大地に戻った後、幾度生死生死を繰り返しても、無くなる事も、薄まる事も、朽ち果てる事もないのであります。例えば、プールに一滴の青いインクを落とせば、青いインクを落とした事も分からない程希釈され、何の意味も無い様に、一滴の青いインクを落とした事さえも嘘言と疑いをかけられる様になってしまいます。水質検査をしても、一滴の青いインクを落とした事を証明する事は出来ないでしょう。しかし、妙法蓮華経の功徳の縁は、一滴の青いインクを落とすことにより、プール全体が妙法蓮華経の青に染まるのであります。しかも、このプールは、無量無辺の無限のプールなのであります。一切衆生に、【乃至法界平等利益】妙法蓮華経の縁を深く結び、一つとして無駄も、朽ち果てる事も無い、永遠の未来まで、一度積まれた南無妙法蓮華経の功徳は、永遠に消滅しないと示されているのであります。

天文学上、分かっているだけでも、端から端まで10万億光年（1光年とは、光が1年に進む距離、9兆4600億km）の幅を持つ銀河系の中だけでも、太陽の様な惑星が、2000～4000億個有ると言われます。銀河系外にも、銀河系に類するであろうと推定されるものが無数にある事が解っています。そうすると、巨大な引力を持ち、惑星の中心となる太陽に準ずるものは、現代の科学者が把握する事が出来ない程、数兆個以上、現代の研究段階では数え切れない無数にあると言えるのであります。つまり、現代においても、分からないという事が分かっているという段階なのであります。又、ブラックホールの存在は分かっていても、ブラックホ

ールに吸い込まれた先は、分からないのであります。地球と同じような生物が存在する惑星が存在していても、何も不思議な事ではないのであります。これだけでも、神が天地を創造したものでは無いという事が良く分かります。何故ならば、現段階で分かっている事さえ、「聖書」には書かれていないし、天地創造を信じ主張する人々自身が、「地動説」も知らず、宇宙がどう造られているかも分からず、示す事が出来ないにもかかわらず「天地創造」を自己主張し、信じ込んで、洗脳されているだけなのであります。現在解明されている事にさえ、「聖書」は対応出来ず教条主義的に、否定、拒絶しているだけなのであります。現代の宇宙科学でも、銀河系宇宙はビッグバーンから始まったと言う説が主流になって、銀河系宇宙の膨張の最先端が宇宙の果てと考えられていますが、全ての惑星の始まりが、ビッグバーンであるとは断定出来ません。そして、ビッグバーンでの膨張の果てと考えられる、その果ての先に、これから膨張して行く空間がある事は当然分かっていて、銀河系以外の未知の存在が有る事が分かっているのでありますから、ビッグバーンが始まりではなく、ビッグバーン以前の時間空間が当然あるのであります。つまり、宇宙は、無限、無始無終、永遠常住、無量無辺の存在なのであります。この存在全てを含んでの【大海】なのであります。この【大海】は、物質的、面積、体積で把握される世界の宇宙だけでなく、心の世界、過去、現在、未来も含む、【色・心】全てを包含しての【大海】なのであります。地球を覆っている地球だけの大海のイメージとは、発想、次元がまったく違うのであります。

人間の【心】の世界も、【色（身）】の世界も、人間の身体は約60兆の細胞で出来、その一つ一つの細胞に脳に値する、記憶と思考力が具わっているわけですから、決して西洋医学の肉体は唯物的、無機質な機械、器と考える思考では無く、地球に有る様な有限の大海でも無く、まさしく、無限、無始無終、永遠常住、無量無辺の大海なのであります。生死、自他、彼此の差別区別の無い平等、公界の世界なのであります。生命の五元素として、仏教経典に説かれる【地水火風空】の五大には、法華経によって、どんな存在生命にも【悉有仏性】として、仏の生命が具わっているのであります。仏の生命が具わっているということは【地も十界互具の生命】【水も十界互具の生命】【火も十界互具の生命】【風も十界互具の生命】【空も十界互具の生命】が具わっている事が説かれています。【唯物論】的思考の、物質の集合体によって肉体が出来、精神は、その肉体に、別の物として宿るという、【色心別体】の存在ではなく、【色心不二】なのであります。どんな存在生命も、そこに存在する因縁があって【色心不二】として、存在しているのであって、全ての生命は因縁果によって繋がっていて、偶然存在する物は一つとして無いのであります。【唯物論】から考えれば【地水火

風空】は無機であって、心は存在しないと考えます。しかし、全ての【色・心】との因縁によって、その物が、そこに存在しているわけですから、人間が【地水火風空】と相互コミュニケーションをとれないだけであって、【地水火風空】そのものに、心が具わっていると思考する事が自然であり必然であります。脳だけに心が有るのでなく、60兆全ての細胞があってこそ、心という存在が形成されているのであります。【唯物論】的思考の【色心別体】では、森羅万象の生命を説明する事は出来ないのであります。仏教では、全ての生命の五元素を【地水火風空】と表現しますが、人間、動物、虫、植物、土、石、水、空気、光等々全ての存在を粉砕し、現代の科学で解明されている【量子（これ以上小さいものは無い）の段階に至る】微細にしていった時、そこには差別も区別も無く、全ての生命の元始は平等で同じであるという事が分かり、全ての生命【仏性】が繋がり、支え支えられあって生きている。その一つ一つに仏の生命【仏性】が具わっているのであります。ですから、【地水火風空】は、理論的に差別区別の無い平等の生命の源なのであり、全ての生命に仏の生命が具わると言えるのであります。ですから、妙（空）法（風）蓮（火）華（水）経（地）と重ね合わせ、妙法蓮華経は全ての生命の根源本質を表す法であると説かれるのであります。

【塵を大地に埋む】も【露を大海にあつらへ】も、当然同じ意味を表しているのであります。

※補足※

御骨を御墓に納める事を、【埋葬】と表現します。これは火葬文化になった現代においても、土葬文化の時代の考え方を、そのまま意識として継承している訳であります。現実には公衆衛生上の理由から、土葬は規制され、火葬する方向へ行政指導が行われ、土葬のパーセンテージは年々減少の一途であります。火葬され骨上げされ、骨壺に納められ、土に触れる事が無いにもかかわらず、四十九日を過ぎると、御骨を御墓へ【埋葬（埋め葬る）】すると、現代でも言うのであります。これは仏教文化の中で、自然に帰る、自然に溶け込むという考え方、思想があるからであります。【聖書】を教条主義的に信仰する、キリスト教文化の【土葬】は、死者の【復活】を信じ願う行為で、日本の【埋葬】とは、全く次元の違う発想なのであります。これとは別に、これは西洋も東洋も共通しているのですが、天空は自由を想起させ、【天国】【成仏（インドにおける鳥葬、風葬も、この発想）】と、考えられ、死んで星になっているとか、空から見守ってくれているという考え方が昔から存在しています。地は埋められることにより自由が拘束されるという事から、地獄と考えられてきました。実際に犯罪処刑の一方法として、罪人を生き埋めにするという刑罰が行われていた時代があり

ます。生活する大地の上の空には無限の空間の自由が有り、下には不自由が有るという、感覚発想であります。【埋葬】は墓石の下のカロウトへ入れますが、この地獄感覚とは、全く意味発想が違うのであります。

不思議に感じるのは、【復活】を信じるキリスト教文化圏に於いて、【臓器移植】が日本よりも先進的に行われ、死者は自然に帰ると考える日本に於いて、献体から臓器を取得する事に、多大な抵抗観があり、「臓器を取ってしまったら次に生れ変わって来た時に、臓器の無い体で生まれて来たらどうするんだ。」という、そもそも臓器が無ければ、人間として産まれて来る事が出来ないにもかかわらず、そういう考え方が根強く存在している為、日本国内での臓器提供者が少なく、臓器移植手術を受ける為に、多大なリスクを被っても海外へ道を求める人々や、臓器売買の問題が生じているのであります。臓器を単なる機械、部品と考え、提供する、されるという考え、感覚でなく、亡くなる人の臓器で他の人の生命を支え、産まれて来て良かった、生きて来てよかったという、繋ぎあって支え支えられあっていく永遠の生命の喜びを提供する側と、される側で共有するという思想が理解熟成して行って欲しいと思います。外国人の臓器ならば良いけれど、日本人の臓器ならば嫌だという意識問題まで存在しているのであります。その上信仰心の無い、過去現在未来の死生観の無い医療関係者が特別優れた人格の持ち主ばかりの様に、世界全体の生命倫理を語り、取り仕切る資格が有るとは到底思えないのであります。一方、世界中の宗教者も、今ここで論じている、【成仏の姿】、【三世の生命観】を、各宗各派の我田引水的、荒唐無稽な【天国】【極楽】にしがみついているだけでなく、自宗の矛盾した主張を否定し破ってでも、世の中の無信論者に対しても、理論的に噛み合い議論出来るだけの説得性のある教義を示す努力をしなければいけないのでありますが、偏党執心、我田引水に固執するばかりで、自宗の繁栄だけしか考えていないのであります。世界中に自宗だけが繁栄すれば、世界中が幸せになるという組織の拡大に執着しているだけで、宗教の本来の目的である【一切衆生平等成仏の法】を全く考えていないのであります。宗教者自身が、自宗の固定概念に閉じこもる事なく、真理の探求に努力すべきなのであります。

その上で、【法華経の第三≪化城喩品第七≫（開結333p）】の、

願わくば此の功徳を以って普く一切に及ぼし我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん

を引用され、【一切衆生平等成仏】の、無差別の仏界、公界の世界、【大海・大地】を【一切】と示されているのであります。

縁によって大海から一滴掬われ、娑婆世界に生まれた生命の住む国土は、自我（エゴ）無くしては生きられない【私界】であります。【私界】で生きる為には自我が必要になるが故に、自他、彼此を主張し、守らなければいけないのであります。逆に自己所有を得ようと努力しても、なかなか思うように得られないという苦しみの世の中でもあります。法律も個々の権利を守り、自他の境界を明確に究明し、争いを最小限に抑える為、細部に至るまで、本来【公界】である、空や海まで、領海、領空と、自他、彼此、責任の所在を徹底するのであります。法律が、「自他、彼此、関係無く、自分の物も他人の物もありませんから、仲良く共有して使いましょう。」となったら、土地、建物の権利も成り立たなくなり、世の中は混乱に陥るのであります。この娑婆世界に生きる全ての生命は、【我思う、故に我あり（デカルト）】の、自我を無くす事、否定する事は出来ないのであります。しかし、成仏の世界、仏界の世界は、【私界】と反する【公界】の世界であります。故に、【私界】の【生老病死】の世界を、壽量品第16において【方便現涅槃】と断言するのであります。つまり、一滴掬われ、生老病死の生涯が終わった生命は、永遠常住の自他、彼此の無い、差別区別をつける事が出来ない、故郷の【大海・大地】に帰り、【法界平等】に溶け込んで行くのであります。いったん溶け込んだ【地水火風空】は【覆水盆に返らず】同じ【地水火風空】が整合するのでなく、その【大海】の中で、永遠の過去からの因縁の繋がりを得て、他の【地水火風空】と繋がり、次の新しい生命を得るのであります。

例えて言えば、植物の僅か数ミリの一粒の種には、森羅万象全ての生命の、永遠の過去と、森羅万象全ての生命に繋がる永遠の未来が、タイムカプセルの様に凝縮して納まっているのであります。大海全体の生命と一滴の生命の関係とは、そういうものなのであります。

仏教経典の中には、釈尊の【本生譚ほんしょうだん（釈尊が過去世に菩薩道を行じていた時、〇〇という名の菩薩であったという生まれ変わり話）】これに類して、幾つもの生れ変わり話が、経典の中に散りばめられています。一例を挙げれば、釈尊が昔国王として産まれ、大乗信心修行の為に国王の位を捨て、王宮から離れ法を求め修行していた時に、妙法蓮華経の法を持った、阿私仙人に出会い、1000年の間、この阿私仙人に身命をかけて仕え、仏道修行に励んだ結果、成仏する事が出来た、1000年間釈尊が釈尊として生き、阿私仙人も阿私仙人として生き続けるという話の設定自体が道理から外れる方便だという事が良く分かります。この阿私仙人が、今の提婆達多であるという物語であります。提婆達多は、釈尊殺害計画を阿闍世王を巻き込み実行し失敗し、反省の無いまま、生き乍ら地獄に堕ちたにもかかわらず、

地獄で釈尊から修行時代の妙法蓮華経の縁によって、記別を受け、未来、天王如来として成仏すると告げられるという内容で、悪人成仏の見本と、法華経の善悪不二の教義を提婆達多の振舞いを通して説かれているのであります。いずれにしても、親鸞の【悪人正機説】よりも、勝れて【十界互具の成仏】の【妙法蓮華経の法】によって成仏する事が明かされているのであります。

「無人島に一冊持って行くなら、歎異抄だ。」と、司馬遼太郎が言ったと評判になっていますが、生命は善悪二元論では成り立たないのであります。司馬遼太郎は、その事が理解出来ていなかったのであります。

不信逆縁の者が、妙法蓮華経の縁に触れて、信、順縁の者に変わるというパターンが一般的ですが、この提婆達多の話は、このパターンではなく、信、順縁の阿私仙人が、釈尊殺害実行犯の、不信、逆縁の提婆達多に変わり、それから、妙法蓮華経の縁によって天王如来として仏になるのであります。信→不信→信であります。この話から、【善悪一如】十界互具の生命の転変は、固定、不動のものではなく、不規則、無作為である事が良く分かるのであります。

釈尊が三千塵点劫で、大通智勝仏の16番目の子供だったというのも【本生譚】であります。

この様な話が、仏教経典の中に沢山説かれてある為に、【輪廻転生信仰】が当然の常識のように世の中に流布定着してしまっているのであります。この【輪廻転生信仰】と相対して、過去に罪を犯したから、醜い顔体、肢体不自由者で産まれて来たなどという【因縁・宿業】話が、誰もが凡夫で、過去の事も未来の事も、爪から先さえ分からないにもかかわらず、僧侶や、信心歴の長い人や仏教知識を齧った人、スピリチュアルに通じている等と自称する人々が、「私は天草四郎の生まれ変わりだ」とか、言った者勝ちの訳の分からない事を主張したり、宿命だ、宿業だ、過去世の謗法の罪によって苦しむんだと、人の心を脅し、呪縛洗脳しているのであります。幼児に地獄話をして、恐怖心と共に、善因善果、悪因悪果を伝える道徳教育の為の物語教材には良いかもしれませんが、それが過剰になり、社会全体に及び、自他に渡る洗脳マインドコントロールになってしまっているのであります。

一方【いたこ】東北地方津軽、南部地方にみられる民間の巫女が死者の【口寄せ】【いたこ】の口を借りて、死者が語るというのは、【輪廻転生】とは考え方が違い、死者の国が別に存在しているという考え方であります。しかし、これとても胡散臭い慰め、洗脳マインドコントロールであります。テレビ番組で放映していた【口寄せ】の映像を見ていましたら、【いたこ】が津軽弁で、死者になり替わって話をする。すると大阪から来ていた家族が、

「何でおかあちゃん関西弁じゃないん。おかしいじゃん。」と言っていました。この指摘は正しいと思いました。本当の依憑ならば、亡くなった人のまま、方言でも、ドイツ語、フランス語、英語等々でも、しゃべらなければ【口寄せ】とは言えないのであります。なる程、本物の依憑じゃなく、依憑している演技をしているという事が良く分かりました。しかし、こんなまやかしでも満足し、慰められている人達も沢山いるのが世の中の現実なのであります。

大川隆法に至っては、「仏陀、日蓮、空海、キリスト、ソクラテス、坂本龍馬、天照大神の霊が乗り移って霊言を語れる」等と【口寄せ】と同じ霊媒師を自認しているのであります。何の脈絡も無く、支離滅裂であります。統一教会も同じく支離滅裂であります。しかし、こんな教えでも【信仰の自由】の法律によって、信仰と認められているのであります。【鰯の頭も信心】として認められているのであります。どれだけ矛盾に満ちた教えでも、【信仰の自由】であります。間違った法を信じるのも自由です。しかし、生命とは何かを正面から説いている法を信じなければ、【溺れる者は藁をもつかむ】藁の教えでは、又々その教えと共に溺れ、彷徨う事になってしまうのであります。自己を否定し、自己の魂、思考を教祖に預け任す。疑い迷う心を洗脳によって、教祖の言うがままの人間になることは、純粋でも素直でも信仰でも無いのであります。自分を無くし、ロボットの様に言うがままになっている事は、純粋に見えますが、都合の良い抜け殻ロボットであり、洗脳催眠術にかかっているだけであります。信仰は自分を無くす事では無く、ありのままの自分を自覚する事であります。自分が悩み、迷い、疑い、これらを自分でのたうち回りながら、晴らす努力が信心なのであります。宗教のほとんどが、疑うな、純粋に、教祖、指導者の言うがままを信じろ、疑いは罪だと言い、疑いを起こす自分が邪悪なんだと、思い込ませ、自己否定させていきます。疑いの無い人間はいないのであります。疑うからこそ、探求し真実が何かが解明されていくのであります。疑いをバネにして生きているのが人間なのであります。疑いを晴らす努力の先に、何者にも左右されない本当の純粋があるのであります。教祖、指導者の言う通りという団体組織には、マインドコントロールだけで真実の信仰は無いのであります。【疑い、迷い】とは、【十界互具】なのであります。

神道で説く、【黄泉（よみ）】も、死後、魂が行く所。死者が住むと信じられた国の存在を示していますが、神道は【穢（けがれ）】を忌み嫌いますので、穢の最たる死を別の国に封じ込める考え方を産んだのでしょうが、生命は、生死一体で生命なのであります。生きて

いる時だけを生命として尊ぶという考え方では、生命を尊び敬う事など出来ないのであります。死は穢れでは無いのであります

しかし、【口寄せ】の死者の国は兎も角として、【六道輪廻】の範疇から出る事の無い【輪廻転生】の死生観では、【六道輪廻解脱】の成仏観を語る事は出来ないはずであります。つまり【露を大海にあつらへ塵を大地に埋む】の成仏主体の考え方から見ると、まったく次元の低い方便にもならない間違った辻褄の合わない荒唐無稽な矛盾論法なのであります。

永遠の過去から繋がっている生命の【大海】【公界】永遠の過去世からの因縁によって【地水火風空】の五大が仮に和合して、その調合により、人間界、動物界、植物界等々に一滴の生命として掬われ、【娑婆世界】という【私界】に産まれて来ます。という事は、差別区別、始まり終わりの価値判断が基準常識の【娑婆世界】【私界】に生きているけれども、実は生命の源の故郷は、【大海】【公界】なのであり、差別区別、始まり終わりの無い生命が本来の生命なのであります。しかし、それを【私界】の中で忘却し、【娑婆世界】【私界】だけの理論で、信仰も考えられて行ってしまうのであります。ですから、病気が治る、お金が儲かる、悩みが無くなる、仏におすがりする等々の現世利益目的の信仰が主流になって、信仰者自身が混乱し、もっと大切な【成仏】を求める信仰は、想像する事、理解する事がむつかしくて分からんとなって、成仏さえも、阿弥陀如来に救って貰い、極楽浄土で安楽に暮らすという様な、来世利益になってしまうのであります。

例えば、Aという人が【輪廻転生】してAとして産まれて来るという事は、時代、出生地、親、兄弟、友達、先生、同級生、学校、就職、伴侶、子供、孫等々全部が同じでなければ、Aという人の心、性格、人格は得られないのであります。定業が50%不定業が50%と言っても、50%では、同じAという人にはならないのであります。順番に個々生きて死んで行くにもかかわらず、Aさんを中心にして、総体が同じ人間として、総ての環境、人間関係も同時に生れ変わらなければ、Aさんが生れ変わったという事にはならないのであり、それぞれの生命に世代のズレが有るのですから、そんな事は不可能なのであります。現世にあったことの続きが未来世ではないのであります。

宮本武蔵が、現代に【輪廻転生】しても、剣豪宮本武蔵として生きる事は出来ないのであります。世界剣道大会でチャンピオンになったとしても、巌流島で佐々木小次郎と闘う宮本武蔵ではないのであります。

アメリカの御信者に、日蓮大聖人の法を伝えようとすると、どうしてもキリスト教文化を背景にした、言葉のニュアンスと、日本の仏教文化を背景にした言葉のくいちがいに悩みま

す。例えば、【神】というと、キリスト教文化の中で育った人達は、天地創造の神をイメージします。日蓮大聖人は、諸天善神や霊魂というイメージになります。その違いを伝えるのが難しいという話を、先輩住職に話したところ、「アメリカの御信者は、死んで、日本人に生まれ変わって、仏法を学べば良いんだよ。」と言うのであります。こんな幼稚に歪んだ【輪廻転生】を、指導者である僧侶が、まことしやかに自坊の御信者さんにも話していると思うと暗澹たる気持ちになりました。竜女の【変成男子】以下の、間違った思い込みであり、日蓮大聖人の説く教えでは無いのであります。

【大海】【公界】に溶け合っている【妙（空）法（風）蓮（火）華（水）経（地）】は、無始無終、因→縁→果→因→縁→果の循環によって永遠常住であっても、肉体、人格、心は【輪廻転生】せず永遠常住ではないのであります。ですから、その時代状況の人事の忖度の妙で選ばれた大石寺の代々の貫主が、その時代の日蓮大聖人である。日蓮大聖人再誕、生まれ変わりであるとか、池田大作さんが日蓮大聖人の生まれ変わりであるという稚論は、自分を偉く見せようとする、荒凡夫の身の程知らずの、権威主義、名聞名利に蝕まれた増上慢病なのであります。日蓮大聖人は、後にも先にも御一人なのであります。日蓮大聖人に【輪廻転生】は無いのであります。日興上人にも、日目上人にも、全ての生命にも【輪廻転生】は無いのであります。

日蓮大聖人が、文永9年5月5日一の谷にて示された。

【真言諸宗違目】（全139p）に於いて、佐渡流罪後、鎌倉の御信者さんが、日蓮大聖人の助命嘆願運動を起こそうとの動きが有る事を、日蓮大聖人は察知し、

日蓮が御免を蒙らんと欲するの事を色に出す弟子は、不孝の者なり、敢えて後生を扶く可からず、各各此の旨を知れ。

と示し、

①仏天の計らいによって、この佐渡に於いて何かを日蓮に得させようと思ってのことである。

②法華経に書いてある通りになった。法華経の行者である証し。

③過去の法華経誹謗の罪障の故に、今の苦しみの日々が有る。

だから、助命嘆願運動をしてはならぬ、する者は、日蓮の御弟子、信徒ではない。と示されているのであります。

つまり、③に於いて、日蓮大聖人は、常不軽菩薩の【其罪畢己】の自覚をされているのであります。過去世に沢山の諸仏に供養し、善業を積んだ結果、人間に産まれて来る事が出来たわけですが、同時に、自我（エゴ）を通す為に、人を傷つけ、殺し、権経を信じ、法華経

を誹謗し、沢山の罪を犯して来たのであります。同じ人間が、人を助ける手と人を傷付ける手を持つという、矛盾する善悪が不二として、何食わぬ顔で【十界互具】、同居しているのであります。この娑婆世界に生きている以上は、【我思う故に我あり（デカルト）】の自分という存在、【自我】の迷心、悪心を無くす事は出来ないのであります。末法の本仏日蓮大聖人に於いても、その罪障を持っているという事は、我々凡夫一切衆生、誰一人として罪障を持たない者はいないという事なのであります。誰もが、常不軽菩薩の【其罪畢己（ございひっち）≪過去に犯した其の罪をおえ己って成仏する≫】と、四衆の【畢是罪己（しつぜざいい）≪現在犯している是の罪おえ己って成仏する≫】の双方を持っているのであります。つまり、【大海】には、善因も悪因も十界互具の生命として溶け込み、当然【大海】から掬い出され生まれて来る一滴の生命も、善果、悪果の証しであり、その一滴の生命の生老病死の生涯の中でも、又、善因、悪因を積んで行くのであります。ですから、【輪廻転生】は、因果応報を衆生に分かり易く理解させる為に、釈尊自身の【本生譚】や、諸仏諸菩薩の【同性別名】の【輪廻転生】の方便誘引話を通して、妙法蓮華経の法を教化する為の物語なのであります。

次に、御書の中から、【霊鷲山】【霊山】に関する御文を年代順に挙げ、年代に於ける推移変化があるかどうかを比較して見たいと思います。

①【守護国家論】正元元年(1295)38歳（全72p）

法華経修行の者の所住の処を浄土と思うべし。何ぞ煩しく他所を求めんや。

※妙法蓮華経、信行の所、即霊山浄土

②【如説修行抄】文永10年（1273）5月　日52歳（全505p）

命のかよはんほどは南無妙法蓮華経と唱えて唱へ死に死るならば釈迦多宝十方の諸仏霊山会上にして御契約なれば須臾の程に飛び来りて手をとり肩に引懸け霊山へはしり給はば二聖二天十羅刹女は受持の者を擁護し諸天善神は天蓋を指し旗を上げて我等を守護して慥かに寂光の宝刹へ送り給うべきなり

※妙法蓮華経の信行を貫き亡くなった人を、日蓮が迎えに行き、霊山浄土へ苦労しないように助力し、迷わないように案内し連れて行く。

※霊山往詣思想

③【国府尼御前御返事】建治元年（1275）6月16日54歳（全1325p）

日蓮をこいしくをはしせば常に出ずる日ゆうべいづる月ををがませ給え、いつとなく日月にかげをうかぶる身なり、又後生には霊山浄土にまいりあひまいらせん、南無妙法蓮華経。

※今生で会う事が出来なくても、必ず霊山浄土で、御互いに仏として会う事が出来る。

※霊山往詣思想

④【単衣抄】建治元年（1275）8月　日54歳（全1515p）

今生には祈りとなり財となり御臨終の時は月となり日となり道となり橋となり父となり母となり牛馬となり輿となり車となり蓮華となり山となり二人を霊山浄土へ迎え取りまいらせ給うべし、南無妙法蓮華経　南無妙法蓮華経

※妙法蓮華経の信行を貫き亡くなった人は、歩く苦労も必要無い様に、車で迎えに行き、必ず迷わない様に霊山浄土へ連れて行きます。

※霊山往詣思想

⑤【松野殿御返事】建治2年（1276）12月9日55歳（全1386p）

悦ばしからん時も今生の悦びは夢の中の夢、霊山浄土の悦びこそ実の悦びなれと思し食し合わせて又南無妙法蓮華経と唱へ、退転なく修行して最後臨終の時待って御覧ぜよ。妙覚の山に走り登って四方をきっと見るならば、あら面白や法界寂光土にして瑠璃を以って地とし金の縄を以って八の道を界へり。

※妙法蓮華経の信行を貫いて亡くなった時、今生の方便の夢から醒めて、真実の霊鷲山へ詣る真実の悦びを得る事が出来る。その成仏の妙覚の山の頂から下界を御覧なさい。下界の国土が実は全て寂光土なのであります。

※霊山往詣思想

⑥【千日尼御前御返事】弘安元年（1278）10月19日57歳（全1316p）

御身は佐渡の国にをはせども心は此の国に来たれり仏に成る道も此くの如し我等は穢土に候へども心は霊山に住べし御面を見てはなにかせん心こそ大切に候へいつかいつか釈迦仏のをはします霊山会上にまひりあひ候はん

※妙法蓮華経信行の所、即霊山浄土

※現在、直接会う事が出来なくても、信心の心では常に会っている。御互いに亡くなった後に、釈尊が法華経の説法の場とした霊鷲山で確かに必ず会う事が出来るのだから。

※霊山往詣思想

⑦【新池殿御消息】弘安2年（1279）5月2日58歳（全1435p）

八木三石送り給い候、今一乗妙法蓮華経の御宝前に備へ奉りて南無妙法蓮華経と只一遍唱えまいらせ候い畢んぬ、いとしみの御子を霊山浄土へ決定無有疑と送りまいらせんがためなり。

※先に亡くなられた、子供のいる霊山浄土へ貴方を送ります。

※霊山往詣思想

⑧【四条金吾殿御返事】弘安3年10月8日59歳（全1194p）

我が身法華経の行者ならば霊山の教主釈迦宝浄世界の多宝如来十方分身の諸仏本化の大士迹化の大菩薩梵釈竜神十羅刹女も定めて此の砌におわしますらん水あれば魚すむ林あれば鳥の来る蓬莱山には玉多く摩璨山には栴檀生ず麗水の山には金あり今此の所（身延山中）も此くの如し仏菩薩の住給う功徳聚の砌なり

※妙法蓮華経の信行の所、即霊山浄土

※即身成仏

⑨【上野殿母御前御返事】弘安3年（1280）10月24日59歳（全1570p）

同じ妙法蓮華経の種を心にはらませ給ひなば、同じ妙法蓮華経の国へ生れさせ給ふべし。

※先に亡くなられた子供と同じ、霊鷲山に生まれる事が出来る。

※霊山往詣思想

⑩【上野尼御前御返事】弘安4年11月15日60歳（全1580p）

法華経と申すは手に取れば其の手やがて仏に成り、口に唱ふれば其の口即仏なり。

※妙法蓮華経の信行の所、即霊山浄土と、即身成仏に重きを置いているが、即時の成仏でなく、「手に取れば、口に唱えれば」と時差が有り、信の志を立てたる刹那の成仏と微妙な違いが有る。

⑪【是日尼御書】建治元年～弘安5年の身延期4月12日（全1335p）

又御本尊一ふくかきてまいらせ候。霊山浄土にてはかならずゆきあひたてまつるべし。

※本尊の相貌、南無妙法蓮華経の法を中心とした霊山浄土なり。

こうして並べて見ると、年代順に表現の推移が有る訳では無い事が良く分かります。【守護国家論】から【是日尼御書】迄の11通の対象の御信徒の信心歴、信仰心の浅深、学識の浅深等々の機根の差異によって表現を変えているわけで、日蓮大聖人御自身の【霊鷲山（成仏観）】には、何の推移もブレも無い事が分かるのであります。つまり、【立正安国論】以前の著述である【守護国家論】に於いて、

法華経修行の者の所住の処を浄土と思うべし。何ぞ煩しく他所を求めんや。

という、【霊鷲山にて迎える】【霊鷲山へ連れて行く、案内する】という可視的、方便誘引は無く、法華経に示されるままの、山谷曠野、いづれの所であっても、一歩も赴く事無く、法華経信行の場所こそが、即霊山浄土である事を説示されているのであります。かと言って、方便誘引の表現は、機根の低い者への真実でない教えとは言い切れないと思います。大切な人が亡くなり、深い悲しみに打ち震えている御信者さんの心に寄り添い、励ます為には、可視的であっても【西方極楽浄土】とは根本的に内容が違う、亡くなって、全ての諸仏諸菩薩の参集する霊鷲山へ詣り、南無妙法蓮華経の法が真実の一切衆生平等成仏の法である事と、先に亡くなられた人も集まっている霊鷲山へ、自分も法華経の行者として妙法蓮華経の法に叶う生き方をした事に間違いがなかった事を確認し、新たな生命を得たならば、より一層、自他共に妙法蓮華経の法を多くの生命に流布せしめる、法華経の行者として生きようとの思いへ導く為の【霊鷲山】なのであります。世間では、【嘘も方便】という諺がありますが、【方便】とは真実の法へ導く為の仮定の法であり【嘘】ではないのであります。【嘘】はどこまで行っても【嘘】なのであります。しかし【方便】の法を一切衆生平等成仏の法と勘違いし、満足してしまえば、それは【嘘】となってしまうのであります。【西方極楽浄土】の法は【方便】の教えであります。しかし、それに拘泥固執すれば【嘘】の法になり、成仏は出来ないのであります。

今現在、インドの霊鷲山へ行っても、そこは確かに霊鷲山であっても、観光地としての霊鷲山であって、法華経説法の地としての霊鷲山ではないのであります。成仏の象徴としての霊鷲山ではないのであります。西方極楽十万億土へ往生すると言うような、可視化方便を現実と混同混乱錯覚する教えではなく、飽くまでも、法華経信行の心象風景として、時間、空間を超越した【霊鷲山】なのであります。

もう一点、【霊鷲山】と、東北、丑寅の関係であります。

王舎城は、王舎城の東北、丑寅の方角に【霊鷲山】が位置するように建てられているのであります。中国天台宗国清寺の東北、丑寅の方角に【天台山】日本の京都朝廷の東北、丑寅の方角には、比叡山【延暦寺】。大石寺の東北、丑寅の方角には、富士山を霊鷲山に見立てて、【多宝富士大日蓮華山】と山号を称しています。この山号は、日興上人が日目上人と共に謗法厳戒の信仰を貫き守る為に身延離山し大石寺を開いた時に名付けられたものと思いますが、【多宝】は、法華経が一切衆生平等成仏の唯一の法である事を、どの時代、どの国においても駆けつけて証明する【多宝如来】法華経証明仏の名前であります。敢えて【多宝富士大日蓮華山】と称しているのであります。大石寺は、日蓮大聖人を末法の本仏と立てますが、それは【法⇒仏⇒僧】南無妙法蓮華経の法を本因根源とする【依法不依人】によって成り立つ宗旨である事を標榜しているのであります。

丑寅（東北）は、災い、悪鬼が起こると言い、家を建てる時の家相でも、東北に便所、風呂等の穢れを配置しない等と、縁起をかつぐ人が多くいます。その為、都や、御寺、城を建てる時には、災いが起きないよう、世の中が平和に治まるようにと、丑寅（東北）に、御寺や、神社を配置したのであります。しかし、日蓮大聖人は、不吉、災いと考えるので無く、成道の刻、善悪一如、十界互具、明暗去来同時と捉えるのであります。広島県福山市の福山城のほど近い、丑寅（東北）にも、丑寅神社があります。ちなみに、鬼の形相を、頭に角、虎の皮のパンツの姿にしているのは、牛（丑）の角、虎（寅）の毛皮のパンツを表現したものであります。

丑寅の刻は深夜の3時です。

【上野殿御返事】（全1558p）

三世の諸仏の成道は子丑のをわり、とらのきざみの成道なり

と示され、煩悩暗黒の丑の刻と、妙法蓮華経の悟り、仏の悟り、早朝の朝焼けの寅の刻との中間。凡仏一如、十界互具の成仏を丑寅の刻が表し、この意義を踏まえて大石寺では、日興上人の時代より、丑寅勤行をしているわけであります。個人の願い事、人間革命、世界広布等々を願う勤行なのではなく、日蓮大聖人の立てられた【一切衆生平等成仏】の大願の為の勤行なのであります。近年大石寺では、「丑寅勤行とは、法主の衣にお縋りして、御一緒させて頂く勤行」等と卑屈な下僕の様な事を言っていますが、丑寅勤行は師だけの勤行で無く、師弟一箇の勤行であります。法主の権威を出来得る限り高めようと、丑寅勤行の意味さえも分からず否定する考えを編み出しているのであります。

私は、40年間【衆会（しかい）】１日、７日、13日、15日の4日間だけは、三寶院におい

て丑寅勤行を行って来ました。その折りには戒壇本尊の遙拝勤行も当然して来ました。しかし、戒壇本尊に、日蓮大聖人の法が納まっていて、戒壇本尊が体で、他の本尊は影である。戒壇本尊が1番、末寺の本尊が2番、御信者の家の本尊が3番という、格差があるとの、現代の大石寺の考え方は、日蓮大聖人の法との整合性が無く、日蓮大聖人の法を否定する矛盾であると考えるに至り、令和4年から、戒壇本尊特別視の為の遙拝勤行は、するべきではないと考え、止めました。

日蓮大聖人聖誕800年御報恩謝徳を記念して、令和3年2月16日に御経本を出版しました。大正時代から近年に至るまでの大石寺出版の御経本の振仮名は、書き言葉と読み言葉が不規則に混然としている矛盾がありますので、読み言葉だけに統一した振仮名に改正しました。それから、初座の観念文を、

「法華守護の一切の諸天善神、諸天晝夜常為法故而衛護之の御利益、法味倍増の御為に」

三寶供養（2座）は、

「一閻浮提総与、全ての本尊の要旨、一切衆生平等成仏の妙法、御威光倍増御利益広大御報恩謝徳の御為に」

と、改正しました。初座の改正理由は、旧来の、天照大神、八幡大菩薩は、法華経序品に参集した諸天善神の中には無く、日本文化の中だけの諸天であります。世界各国に日蓮大聖人の法を信仰されている人々がいる現状を勘案すると、日本や各国の風俗文化の諸天の個々の名前を挙げ狭小化するので無く、「法華守護の一切の諸天善神」と全体を表現する時代になっていると考えました。

三寶供養（2座）は、

法寶→仏寶（日蓮大聖人）→僧寶（日興上人）の順序で観念文が示されているにもかかわらず、旧来の観念文は、

「南無本門壽量品の肝心、文底秘沈の大法、本地難思境智冥合、久遠元初、自受用報身如来の御當體、十界本有常住、事の一念三千、人法一箇、独一本門戒壇の大御本尊、御威光倍増御利益廣大御報恩謝徳の御為に」

と、なっていて、近年大石寺が主張する、戒壇本尊が体で、他の本尊は影である。戒壇本尊に日蓮大聖人の法の全てが納まり、戒壇本尊が無くなったら日蓮大聖人の法は無くなる。故に戒壇本尊は絶対に無くならない。という、戒壇本尊が法寶であるという考え方が、観念文の中に露骨に表現されています。本尊に格差が有るという理屈は、一切衆生平等成仏の法である法寶とは相容れない外道の屁理屈で有ります。

「一閻浮提総与、全ての本尊の要旨、一切衆生平等成仏の妙法、御威光倍増御利益広大御報恩謝徳の御為に」
と、あくまでも十界互具、一念三千の法である、南無妙法蓮華経の題目【法寶】を本尊に移したわけでありますから、「戒壇本尊」を外し、純粋に【法寶】を根本の観念文にし、本尊に階級は無い事を明確にしました。これで本当の【三寶供養】の観念文になります。

日蓮大聖人は、弘安５年10月13日辰の刻（午前7時～9時の間）に亡くなられました。丑寅の刻に亡くなられていません。仏なら必ずこの時刻に亡くなるはずだとか、この時間に亡くなる事が成仏の証しであるという事ではないのであります。つまり、この【東北】【丑寅】という点も、【霊鷲山】と同様に、法華経信仰上の心象風景を、方角、時刻を通して具体的に信仰者の意識に刻む為なのであります。

【霊鷲山】は、短縮して【霊山】とも言いますが、正式な地名称は【耆闍崛山（ぎじゃくっせん）】で、古代インドのマカダ国の都、王舎城の東北にあった山で、山頂が鷲の頭部の形をしていた為に、【霊鷲山】と呼ばれていたと伝えられています。一切衆生平等成仏の法である法華経説法の場として、釈迦如来が、此処を選んだのであります。

【霊鷲山】は、昔から聖地と崇められていたからこそ、葬送の地でありました。インドでは、カースト制度を基因とする貧富の差が激しい為、葬送に掛ける手間も費用も格差が当然のように存在していたのであります。【霊鷲山】の頂上は、一番高貴な葬送である、鳥葬（風葬）が行われ、中段では火葬、下段では土葬（霊鷲山の周りの林の中に葬るだけ）葬送の場は忌み嫌われる場ではなく、尊貴な場所だからこそ葬送の場に選ばれている訳ですが、葬送が毎日行われる為の腐臭や人骨の散乱の情景は隠しようもないわけであります。釈尊は敢えて、此処を法華経説法の場所として選択したという事は,この【霊鷲山】に立つ者は、御骨が散乱し、死臭が漂う中で、誰もが、自分もこうして他人事で無く必ず死んで行くんだ、生命には限りがあるんだ、生命とは何か、という事を真剣に考え、釈尊が一から、生命の尊さと無常を説示しなくても基礎的な機根が整っている状態から、法華経説法の首題である、生命の永遠常住と一切衆生平等成仏の法を説くことが出来るのであります。

法華経説法の初品、【序品】においては、
一時、仏、王舎城、耆闍崛山の中に住したまい。（開結65p）
とあり、一切の諸天善神が、前代未聞の一切衆生平等成仏の法、真実の法が説かれる、此

処に参集し、これから説き始められる、法華経の説法が最後まで災禍に会わないで説かれるよう、そして、法華経の信行者を守護する事を、全ての諸天善神が此処で誓うのであります。そして、全ての諸仏、諸菩薩も、一切衆生平等成仏の法、真実の法を悟ってこそ成仏する事が出来たわけですから、この場に全員が参集したのであります。こんな大事な法華経説法の始まる場面であるにもかかわらず、序品では【霊鷲山】とは表現せず、【耆闍崛山】なのであります。【霊鷲山】という場所に対して、南岳大師慧思は、【隋天台智者大師別伝】に於いて、

「昔日霊山にて同じく法華を聴き、宿縁の追う所今復来たれり」

と示され、日本の伝教大師最澄も、【天台法華宗伝法偈】において、同趣旨の

「昔、霊鷲山に在りて同く法華経を聴く、宿縁の追尋する所今復来り到れり、（中略）慧思師と共に霊鷲山の七宝浄土の中に処して仏の妙法を説きたまうと聴く」

と示され、これ等の文献から、【霊山一会儼然未散(霊山の一会、儼然として未だ散らず)】という可視的な思想が産まれ、一切の諸天善神、一切の諸仏諸菩薩が集合している場面を表現しているのであります。南岳大師慧思と天台大師智顗の師弟関係が、亡くなった後にも、全ての諸天善神、全ての諸仏諸菩薩が参集している【霊鷲山】でまみえ、法華経の説法が【常住此説法】常に行われているという霊鷲山で、同じ時代に生きた南岳大師と天台大師が、永遠常住の生命の上から、御互いに亡くなった後も、霊鷲山で、今度は御互い、弟子として、師匠の釈尊から直接法華経の説法を受けようと考える事は、容易に理解出来ます。しかし、伝教大師最澄（767～822）は日本、南岳大師慧思（515～577）は中国で、時代も国土も違います。それでも、この様に断言し表現するという事は、時間、空間を超越した法華経信仰上の成仏の心象風景をそのままに表現されているという事が良く分かるのであります。つまりこれは、【霊山往詣思想】と同じ内容であります。【霊山往詣思想】は、一切衆生平等成仏の真実の法が説き語られる一切の諸天、諸仏、諸菩薩が一同に参集している所であり、亡くなった後も、その法の正しさを改めて確認、確信する所であるという事を表現しているのであります。こうすると、【阿弥陀経】に示される、「衆生聞く者、當に発願して彼の国に生ずべし。所以は如何、是の如く諸の上善人と倶に一處に會するを得ればなり」の【倶會一處】と【西方極楽十万億土の極楽浄土】は同じなのであります。文盲率95％以上と言われる鎌倉時代に、ただ南無阿弥陀仏と唱えれば、今生の理不尽な身分差別、家柄、搾取等々が当然とされる苦悩も、死んで極楽に往生し楽になるという単純な来世利益のキャッチフレーズに、何の教義も、学も行も必要無いと縋り付いたのであります。阿弥陀如来は、いかなる

法を用いて、衆生を成仏させる事が出来るのかさえも考えず、絶対他力だ何も考えるな、考えてはいけないと言われ「念仏の物知らず」の言葉に象徴される様に、日本国中に広宣流布して行ったのであります。その為には限りなく可視的方便誘引の内容が、現実であるかのように混同し受け入れられ、西方極楽浄土が本当に有ると信じ西へ向かって歩き、粗末な船で西海を渡り死をも恐れず入水して行く衆生、現代でも先祖故人の墓に【倶會一處】と彫り、西に向けて墓を建立する事が行われているのであります。西方はインドを想定し、平安時代から昭和初期に至るまで、インドへ実際、気軽に行ける人などいない為、全く幻想化、理想化された妄想の中で、イメージだけが肥大化した存在であったのであります。そして念仏の僧侶も、その事を利用したのであります。つまり【西方極楽浄土】は心象風景では無く、今も現実のものとして念仏信仰者に受け止められているのであります。しかし、【西方極楽浄土】と【霊鷲山】が、教義的に同じ場所であったとしても、まったく根本的に違う点があります。それは、【霊鷲山】は、法華経の説法という妙法蓮華経の法が中心で、【倶會一處】は、阿弥陀如来を中心者と思い込み、上善人（諸仏）が集まっているというだけの表現止まりであり、そこに法は無く、その場に何の法が有るのかが展開されているかが示されていないのであります。

阿弥陀如来は、法華経28品の中に、2回出てきます。

【化城喩品第７】（開結340p）大通智勝仏の16王子の9番目の子供として出てきます。

「西方に二仏。一を阿弥陀と名づけ、二を度一切世間苦悩と名づく。」

と、16王子の第9番目の子供であることを明示しています。という事は、阿弥陀如来は、三千塵点の有縁の法華経覆講の行者という存在であり、という事は、阿弥陀如来が衆生を救う為に用いる法は、妙法蓮華経だという事なのであります。

【薬王菩薩本事品第23】（開結604p）

「即ち安楽世界（極楽浄土の別名）の、阿弥陀仏の大菩薩の囲繞せる住処に往いて、蓮華の宝座の上に生ぜん。」

法華経の中に登場しているという事は、阿弥陀如来は法華経の行者として、法華経を悟ったが故に、成仏し、衆生に法華経の説法をしたということなのであります。つまり【倶會一處】【西方極楽浄土】とは、法華経の説法の場【霊鷲山】という事なのであります。凡夫が、一切衆生平等成仏の法である、妙法蓮華経の法を、信心修行して悟り、仏に成り、自分の経験を踏まえて、衆生に法を説くのであります。どこまでも法を源とするのであり、法が元始でなければ、全ては始まらないし、成り立たないのであります。仏が世の中に現れる前から

法は有るのであります。阿弥陀如来、大日如来、薬師如来等々の仏を源とする始まりは有り得ないのであります。

法を悟ったから仏になったのであります。仏よりも前に法がなければ、仏は法を悟れないのであります。釈迦如来、阿弥陀如来、大日如来から成仏させて貰ったり、成仏の認可を貰ったりするのではないのであります。仏も衆生も、法を信じ法に叶う生き方をして成仏するのであります。つまり、仏に助けて貰う、救って貰う、守って貰うではなく、あくまでも法に叶うことによって成仏出来るのであります。ですから仏の名前を本尊や、題目にして唱えても、名前は法では無いのですから何の意味の無い事なのであります。その仏が悟った法を本尊や題目にしなければ真実の信仰にはならないのであります。壽量品第16に於いても、釈尊は、父として医者として、飲毒し、本心を失う子供達に、薬（妙法蓮華経）を調合します。つまり、仏は医者、薬は妙法蓮華経の法であります。医者は、薬や手術の技巧によって病者を救うのであります。薬や過去からの医術の技巧の経験歴史無くして、医者だけでは病者を救う事はできないのであります。名医とは、薬と手術の技巧を適材適時適所に駆使して、人を救うのであります【法】を適正に使い切れるからこそ名医と称されるのであります。薬、手術の技巧という【法】がなければ、何も出来ないのであります。医者である、釈迦如来、阿弥陀如来、大日如来を拝み、仏の名前を題目として唱え、すがっても、仏には成仏させる力は無いのであります。仏が直に衆生を救えるならば、【飲侘毒薬　薬発悶乱　宛轉于地】の子供達に対して【求好薬草　色香美味　皆悉具足　擣篩和合】の良薬を調合する時間をかけないで、仏が直に治せば良い事になります。法（薬）が無ければ、仏（医者）は、衆生を救い、成仏へ導く事が出来ないのであります。日蓮大聖人も、日蓮大聖人が私達を成仏させてくれるのでは無いのであります。ひたすら、法華経の行者として生き、妙法蓮華経の法に叶う事によって成仏する事が出来る事を、我々衆生に説き続けているのが末法本仏日蓮大聖人なのであります。

壽量品第16のみで【耆闍崛山】の呼称を【霊鷲山】とし、

「時我及衆僧　俱出霊鷲山（時に、我及び衆僧　共に霊鷲山に出ず）」（開結507p）

「常在霊鷲山　及余諸住処（常に霊鷲山　及び余の諸の住所に在り）」

他の27品では、【耆闍崛山】と表現しているのであります。これは明らかに、壽量品第16と、他品と、その内容に違いが有る事を示し、【霊鷲山】という名称が、経文の内容からも、信仰上の成仏の心象風景を、【俱出（仏と俱に霊鷲山に出でよう）】【常在（常に仏と

俱に在り）】表現している言葉である事が良く分かるのであります。【霊山一会厳然未散】【霊山往詣】も、この経文が源なのであります。

【地獄】も可視化方便誘引の内容が、経典には、方便でなく真実の様にリアルに示されていますから、経文を本気で受け止め混同している人達も世の中には多くいるのであります。

【八大地獄（八熱地獄）】【八寒地獄】【十六小地獄】【一百三十六地獄】等々、経典によって、様々な名称表現で示されているのであります。

法華経譬喩品第3（開結240p）にも「正法誹謗の者、其の人命終して阿鼻獄に入らん」

と示されています。実際に、地獄絵図といって、地獄の血の池、針の山、生前嘘をついた者が、舌をやっとこで抜かれている姿等々をリアルに描き、掛け軸や、絵巻物にし、老若男女問わず、道徳を守り、正直に偽りなく生きる様に戒めるために、この様なものが活用されたのであります。この【地獄】の中では、【無間地獄】が一番深く、重く、苦しみの極地の地獄だと説かれています。【無間地獄】は【八大地獄】の最底下の地獄で、【大阿鼻地獄】とも呼ばれます。極悪非道の強盗放火殺人の衆生でも【無間地獄】には堕ちないけれど、五逆罪（殺父、殺母、殺阿羅漢、出仏身血、破和合僧）の一つでも犯す、正法誹謗の者だけが堕ちるとされる、地獄の中のこれ以下は無い一番底の地獄であります。【無間地獄】の【無間】は隙間無くという意味で、身体を首だけ出し土に埋められ、溶けた鉄を口から流し込み、身体の細胞の全てを隙間なく殺す事で【無間】と表現します。そして、一度殺しても、又、地獄の獄卒が生き返らせ、一服の間も与えないで又初めから、溶けた鉄を口から流し込み、何度も何度も殺しては生き返らせ、殺しては生き返らせの苦しみを与えるのであります。つまり、死ねば御破算で楽になれる、逃げられる事は無く、死んでも生命は永遠であり、その罪の重さを身をもって経験しなければならない、因縁果は巡り絶える事は無いという事を戒め、五逆罪、正法誹謗は、極悪非道の強盗放火殺人の犯罪よりも重罪である。何故かと言えば、謗法はその人間だけでなく、一切衆生の生命に関わるだけに、その罪は重いのであります。まさしく【無間】なのであります。しかし、この【地獄】も、どれ程リアルに示されても、現実には無いのであります。つまり、【地獄界所具の仏界】地獄界にも仏界有り、仏界にも地獄界有りの十界互具の心中に仏界も地獄界も具わっているのであり、【霊鷲山】と同じで、死んで【地獄】に行くのでなく、謗法をしている今が、苦しみを自覚しようがしまいが【地獄】なのであります。

【頭破作七分】も、「謗法の罪で、事故にあい、頭蓋骨骨折で死亡した。頭破作七分だ。」と平気で断言する、信仰なま囓りの人々が沢山いますが、それでは謗法者は皆、そう

いう悲惨な亡くなり方をするかといえば、そんな事は当然ありません。【頭破作七分】は、心、精神の矛盾混乱を表現しているのであります。南無妙法蓮華経の正法を自己我見の屁理屈で頑迷に拒絶し、妙法蓮華経の法を正法と受け止める事が出来ない事自体が、【頭破作七分】なのであります。

【即身成仏】との文意は、天台大師智顗が、法華経【提婆達多品第12】を踏まえて

【法華文句巻8下】に、

「仏の受けたもうこと疾きとは果を獲ること速かなるなり（中略）胎経に云く、魔梵釈女は皆身を捨てず身を受けずして、悉く現身に於て成仏することを得」

と示し、妙楽大師は、これを受け継ぎ、【法華文句記巻8の4】に、

「若し即身成仏にあらずんば、此の竜女の成仏及び胎経の偈は云何が通ぜんや」

と示し、伝教大師最澄は、これ等を踏まえて、【法華秀句巻下】に、

「能化所化倶に歴劫無し、妙法の経力を以て即身に成仏す」

と解釈を示しています。

【提婆達多品第12】は、現実には、竜女の【変成男子】の、生れ変わりを条件にした成仏を示しているのであって、【即身成仏】では無いのであります。しかし、提婆達多を象徴として【悪人成仏】。竜女を、男尊女卑を当然として論じ、畜生に対する差別も当然と説かれているのであります。竜女は何も犯罪を犯していません。竜という畜生の身で女に生まれたというだけで、犯罪を犯した者と同様、もしくは、それ以下の罪人として扱われているのであります。提婆達多品以前の仏教経典の常識常道として、軽蔑否定して来た女人の成仏を、前代未聞初めて説くわけですが、それでも【変成男子】の男尊女卑は、インドの長い長い風俗文化習慣を考慮したのか、残したのであります。しかし、天台、妙楽、伝教は、これを無視否定し、法華経は【一切衆生平等成仏の法】として、【即身成仏】と断言したのであり、【妙法経力即身成仏】妙法蓮華経の法のみにおいて、全ての生命が何の条件も無く、妙法蓮華経を信ずる事によって【即身成仏】出来ると解釈しているのであります。

阿弥陀経、大日経、薬師経等々の法華経以外の教えでは、全て対象は人間だけであります。という事は、人間以外の生命は蔑んで、差別を当然としているのであります。人間の中でも、当然の事としてカースト制を容認しているのであります。法華経だけが、森羅万象全ての生命の平等を基本として、全ての生命の成仏の基となる【悉有仏性】を説示しているのであります。

伝教大師は【法華秀句】に、

「能化の竜女歴劫の行無く、所化の衆生歴劫の行無し、能化所化倶に歴劫無し、妙法の経力を以て即身に成仏す」

と、生まれ変わり死に変わって、何十回何百回と生死の繰り返しをして、成仏を求める歴劫を完全否定し、妙法蓮華経を信ずる志を刹那に立てる所に即身成仏がある。【妙法経力即身成仏】とを示されるのであります。

大石寺も、日有上人が、【日有上人化儀抄】（学林教科書53ｐ）に、

仏事引導の時、理の廻向有るべからず、智者の解行は観行即の宗旨なるが故なり、何にも信者なるが故に事の廻向然るべきなり、迷人愚人の上の宗旨の建立なるが故なり、夫れとは経を読み題目を唱えて此の経の功用に依って成仏す等云々。

と、日蓮大聖人の法も【妙法経力即身成仏】である事を明示されているのであります。

どれ程、日蓮大聖人を末法の本仏と立てても、【妙法経力即身成仏】の【妙法蓮華経】の法を、日蓮大聖人が久遠元初に、妙法蓮華経の法を作ったかのように、大石寺は長く考え違いの混乱をしているのであります。

【一切衆生平等成仏】は、イコール【即身成仏】であります。という事は、【不成仏】は、反対に即身でなく、爾前迹門の荒唐無稽、実現不可能な【歴劫成仏】【煩悩退治】【灰身滅智】の空理空論の成仏でありますから、結局成仏不可能の【六道輪廻】の堂々巡りの迷いの世界なのであります。

十界も良く考えれば、人間界を中央にして、地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、天上界、声聞界、縁覚界、菩薩界、仏界の九界は、全て人間の転変変化する刹那の心の世界の【界】なのであり、地獄という衆生、餓鬼という衆生、畜生という衆生・・・・・菩薩という衆生、仏という衆生がいる訳では無く、人間の心の中に十面の心のゾーンが存在している事を表しているのであります。つまり、仏の心、生き方、菩薩の心、生き方、縁覚の心、生き方、・・・・・畜生の心、生き方、餓鬼の心、生き方、地獄の心、生き方が存在しているという事なのであります。【畜生界】というと、「死んで犬や猫の畜生に生まれ変わる」等と考える人がいますが、人間の心の中に、人を死ぬまでおいつめ、いじめる、動物以下の畜生の心の【界】心の働きが存在しているという事なのであります。

法華経は、【方便品第2】で十如実相を説き、開三顕一を明らかにし、上根の声聞である舎利弗の成仏を約束します。これは【法説周】と言って、舎利弗は、自分の考えに固執せず、素直に妙法蓮華経の法を聞いて素直に受け入れ悟ったからであります。それ故、法華経説法の対告衆の中心者になっているのであります。次に【譬喩品第3】【信解品第4】【薬草喩品

第5】【授記品第6】で迦葉、目連等々の中根の声聞の成仏を約束します。これは、妙法蓮華経の法を譬喩を以て、咀嚼した法を聞いて、初めて悟りを開くことが出来た為、【譬説周】と言います。次に【化城喩品第7】で、【法説周】【譬説周】でも悟れない下根の声聞、阿難、富楼那等に、三千塵点劫以来の師弟の因縁を説き、理解させ、成仏する事が出来る事を納得させます。これを【因縁説周】と言います。二乗も成仏する事が出来るという、法華経以前の経典には説かれなかった教えが、それも歴劫修行無しで、初めて前代未聞として説かれます。その次が、【提婆達多品第12】の全ての悪人、地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人間界を代表象徴して、【提婆達多】の成仏、次に全ての女性、人間以外の全ての動物、植物、虫、土、光、水、火等々の生命、性別を超越した生命を代表象徴して【竜女】の成仏が説かれ、これで【十界互具】の全ての成仏が完成するのであります。地獄・餓鬼・畜生・修羅等の十界それぞれに、仏界が有るという事は、十界それぞれに【霊鷲山】が有るという事であります。一つの生命に地獄界から仏界まで具わるという事は地獄のみの国土世界、仏のみの国土世界が別々にあるのでは無く、十界全ての生命が、一つに繋がっている事を明かし、それまでの思考方法が全面的に否定されます。地獄、餓鬼、畜生、修羅の生命を退治し滅するという歴劫修行は、ここに完全に空理空論として否定されるのであります。末法の十界互具の凡夫に煩悩を退治し尽す、心頭滅却、灰身滅智など出来ないのであります。千日回峰行をしたら、生き仏になる。その修行者に触れて貰うと御利益があると、信じている人々がいますが、そんな教えは仏教経典のどこにも無いのであります。阿弥陀経、大日経等々の法華経以外の経典には、【十界互具の成仏の法】は、説かれていないのであります。

性的少数者ジェンダー人権問題が世界で叫ばれていますが、「男とはこうあるべき、女とはこうあるべき」と、単純な固定概念者が、反対だと言っていますが、一滴掬われて生まれて来た生命は、あるがままであり、他人が認める認めないだと、その存在を否定したり、非難したり、差別したりする権利は、誰にも無いのであります。神が天地創造をしたと言うならば、その様に創造したという事であります。「神は、そういうものは創らない。不良品だ。」と言う者や、日本の神道系の人々が、夫婦別姓や男女の性別以外認めない、国の形が変わってしまう等と、主張していますが、認める認めないでは無く、日本も世界も、昔からこうなっている現実であり、事実なのであります。自分達の固定観念、思い込みで、他の現実、道理を聞かず学ばず、聞き入れないで、否定したり、非難したり、差別したり、そんなものは宗教では無いのであります。只の圧力団体、自分達こそが正しく常識であると思い込

んでいるだけであります。法華経の教えに、提婆達多、竜女の成仏が無ければ、一切衆生平等成仏は無く不完全な教えとなってしまうのであります。あるがままの生命の側に立って、その生命の成仏を認める教えであります。提婆達多も竜女も、個々で存在しているので無く、全ての生命との関わりの中で、提婆達多、竜女の存在の意味がある事を認め、それが現実のあるがままの【大海】の世界である事を認め、差別非難否定区別をする事の愚かさを示しているのであります。提婆達多、竜女の成仏が無ければ、仏の成仏も成り立たないわけであります。

全ての生命が支え支えられ合って、一緒に生きていかなければいけないという事が、仏教に定められた【五戒】①不殺生戒②不偸盗戒③不邪淫戒④不妄語戒⑤不飲酒戒、社会生活円滑化の条件設定の存在に読み取れるのであります。性的少数者は、この人間の基本である【五戒】を犯しているのではないのであります。否定、差別、非難され、憎しみ合い、傷つけ合い、そこから御互いに、被害者、加害者の犯罪が生じる様な事があってはならないのであります。

性別、肌の色、少数民族、風俗習慣、生活環境、身障等々による差別も、多数決という傲慢な暴力なのであります。人間もミミズも、オケラも、アメンボも、担当の分野【界】が違うだけで、その生命の本質である【地水火風空の五大】の生命の根源は平等なのであります。殺生与奪の権利は、仏であろうが、神であろうが、誰にも無いのであります。

仏教の初門から【五戒】が説示され、世界中の国々の法律の基軸になっています。【一切衆生平等成仏】を目的に説かれた仏教ですが、その前提基礎として、【五戒】が説かれているという事は、人間は一人で生きているんじゃない、一人で生きているなら、心を交わし合う、言葉も文字もいらない、全ての生命と共に生きて、初めて人間なのであります。人と人の間に、守らなければいけない約束が有る。社会を成して、御互いに支え支えられ合って生きていかなければいけないという事が【五戒】によって明示されているのであります。

私達が、この世に人間として生まれ、妙法蓮華経の法によって成仏を遂げる事が、どれだけ奇跡に近い稀有な可能性なのかを表現する時、【爪の上の土】という教えがあります。

【開目抄】（全199p）

仏涅槃経に記して云く「末法には正法の者は爪の上の土、謗法の者は十方の土」とみえぬ

これは、【雑阿含経第47】【南本涅槃経第31】【迦葉菩薩品】等を出典として引用されている御文であります。

①人間に産まれて来る可能性は、森羅万象全ての生命を十方の土（分母）として、その中から爪の上に一つまみ乗せた分量（分子）が、人間に生まれて来る確率だと説かれます。その上で、日蓮大聖人は、

②人間に生まれて来た生命の数を、（現在の世界人口は80億人、日本の人口は1億2400万人）十方の土（分母）とし、生涯、南無妙法蓮華経の声、文字を一回でも見聞きする縁を持つ人は、爪の上の土（分子）

③その爪の上の土を十方の土（分母）にして、南無妙法蓮華経の法を信じる事が出来る人は、爪の上の土（分子）

④その爪の上の土を十方の土（分母）にして、その中から成仏を遂げる事が出来る人は、爪の上の土（分子）の可能性である。

と、説くのであります。実に4回爪の上の土を越えなければ、成仏を遂げる事が出来ないという、稀有で困難な可能性を示しているのであります。つまり、自分の意志だけでは、どうする事も出来ない、宿縁深厚の縁と、自らが南無妙法蓮華経の法を信じるという志の在り方が、その鍵である事を誡められているのであります。御信者さんに、この事を話すと、「絶望的じゃないですか。」と多くの人が言いますが、私達信仰者は、①②③まで乗り越えて来ているわけですから、依法不依人の信・行・学・折伏を大切に精進し、十界互具の成仏を遂げなければいけないのであります。【一眼の亀】の譬えも、同じ趣旨であります。

過去の善因、悪因、善果、悪果を総合して、複合する縁によって【其罪畢己】の縁で、素直に妙法蓮華経の法を信じる事の出来る人間として、永遠常住、無量無辺の全ての生命が繋がっている大海から、一滴掬われ生まれて来るか、【畢是罪己】の、妙法蓮華経の法を信ずる事の出来ない謗法者としての縁で生まれて来るか、聞いても上の空で興味無く拒絶する【不聞三寶名】の【一闡提】の衆生か、どれも永遠の過去の中に必ず謗法罪障を持っている為、基本的に、末法の衆生は信仰している者も全て【十界互具】ですから、全てが完全に逆縁の衆生であり、完全な不可逆的固定的順縁だけの衆生になる事はありません。誰もが妙法蓮華経の仏性を一切の諸仏諸菩薩と平等に具え持っているけれども、信じたり信じなかったりの衆生、その仏性に気付かない衆生は、宝の持ち腐れで、仏性を仏性として自覚し、生かさなければ、即身成仏は出来ないのであります。

一滴の生命として掬われ、この娑婆世界へ生まれる。そして、生老病死の人生の中で、改めて今生【其罪畢己（信）】か【畢是罪己（不信）】の機根に深いのかが、その人間の生き

方によって定まる。どちらも死を迎え故郷である永遠常住無量無辺の大海へ皆帰する。信ずる者の生命は、即身刹那に無量無辺の大海に溶け込み、全てに妙法の縁を平等に利益する。不信の生命は、妙法蓮華経の大海を信じる事が出来ない為、生きていた時と同じで、水と油の様に反発分離して、即身刹那に溶け込み同化する事が出来ず、この時差、生前の妙法蓮華経の縁を信じ生かす事が出来なかった事を悔み苦しむ、この矛盾した板挟みの心の痛みを地獄の苦しみと言うのであります。人間界の一日24時間、一年365日という時間の取り決めは、生活運行の基本とする目安が必要な為、人間が作った仮のものなので、人間界時間で何世代にも渡る100年200年と、当然同等ではありませんが、一睡の眠りが千年万年の苦しみとして、受けなければいけない生命、心となり、人間界の時計では分からないし、個々の心の中の時間経過は比較する事が出来ないのであります。しかし、その苦しみを時間、年数に比較換算する事は出来ませんが、溶け込み同化する事が出来ない苦しみは、必ず体験しなければいけないのであります。

即身刹那に永遠常住、無量無辺の大海に即身成仏し溶け込んだ生命は、同時に妙法蓮華経の法が一切衆生平等成仏の一切の諸仏が悟り成仏した法である事を確認し、生前、妙法蓮華経の法に叶った生き方をする事が出来た事を喜び、成仏した事の自覚と自分が積んだ妙法蓮華経の功徳が法界の全ての生命に平等に及んだ事を確認する。仏の国土も地獄の国土も全て自分の生命、心の中にあるのであります。そして又、溶け込んで分散した地水火風空の五大は、他の地水火風空と、それぞれの縁によって、整合して新しい生命として、人間や動物や植物に生まれ、全ての生命に仏の生命が具わり、妙法蓮華経の信心修行によって誰もが仏になる事が出来るという真実の法を、不信から信ではなく、本然として妙法蓮華経の仏性を具え持ち、その上で、妙法蓮華経の縁に触れ、信じ行ずる生命として、生きて縁する人々に妙法蓮華経の法を伝え縁せしめ生きる人生を法華経の行者として目指すのであります。

つまり、法華経の行者として生きる心、姿こそが仏なのであります。永遠の生命は絶え間無く、よどみなく働いている生命ですから、御酒を飲んだり、御馳走を食べたり、温泉につかったりという苦しみの無い快楽だけの、快適、我儘気ままの極楽（成仏）天国など無いのであります。

【成仏の姿】とは、こういうものだと示せば、何だそんな事なのか、そんな事の為に、胸が張り裂ける程の思いをして、日蓮大聖人の法を信仰しなければ、成仏出来ないんだと思い、親兄弟、親類縁者に折伏し、白い目で見られ、罵られても、自他共に成仏出来る唯一の法を信仰しているんだという思いで、今迄生きて来た。成仏したら、もう二度と、こんな人間界

の苦労、苦痛、我慢、ストレスの無い、快適しかない、掃除洗濯炊事をしなくても、時間になれば嫌いなものが無く、好きなものだけの食事が出て来て、常に清潔な環境、衣服が整い、御酒（ビール・日本酒・ワイン・ウイスキー・ブランデー・焼酎等々）も自由に飲み放題、博打もし放題（競馬、競輪、ボート、パチンコ、麻雀等々が有るかどうかは分かりませんが）、負けることが無い。一日中温泉が湧いていて、適温の湯ノ花が香る湯に朝から入る事が出来、病気もケガも無い、眠くなれば、フカフカの布団が敷かれていて、起きる時間も考えないで、好きなだけ寝て、あくせく生活の為、家族の為に上司や客に文句を言われながら、養育費、生活費、老後の生活費を確保しなければならない為の労働も無く、夫婦、親子、兄弟、家族、親戚縁者、友人、とのストレスも無く、他の仏との関係も、嫌な仏は一人もいない等々。まさしく極楽に永遠に過ごす事が出来る。それが【成仏の姿】と思っている人達が世の中には沢山いるのだと思います。もし、ここに羅列したような事が現実にあるとしたら、この生活の中に、仏として、一切衆生平等成仏の真実の法を一切衆生に伝え、縁せしめ、衆生を済度するという責任は放棄する事になります。死んだら御役御免で終わりということでしょうか？成仏するとは、永遠の生命を終わりにして、最後に双六の様に上がって終わりという、強欲な自分満足だけの快楽を得られれば良いという事なのでしょうか？それでは八万四千の仏教経典全ての否定、仏自身の否定になってしまうのであります。という事は、多くの人々が抱いている【仏に成る】というイメージは、荒唐無稽な虚妄な幻想、西方極楽浄土へ往生するという考え方の発想も同様に、荒唐無稽な幻想なのであります。

自分が唱えた御題目は、自分が成仏する為だけのエネルギーとして使いたい、他人が成仏する為のエネルギーとして使われたくない。自分が成仏して貰いたいと願い、追善供養の為に唱えた御題目は、その人の成仏の為だけのエネルギーとしたい、他の人が成仏しようとしまいと、知った事ではない。他の人の成仏の為になったら、ずるいじゃないか。

殺人や、詐欺、暴行等々の犯罪を犯した人間が、何故成仏する事が出来るんだ。平等なんて事は許せない、平等は大嫌いだと考える人がいます。しかし、自分だけの成仏を願うという事が成仏と言えるのでしょうか、成仏とは、あの人が成仏すると、私が成仏出来なくなるという様な定員や、他との競争ではないのであります。信行が熱心に見えなかった人が成仏して、熱心にされていた人が成仏出来ないというのは、おかしいじゃないか、という様な、過去の因縁も心の表裏までも分からない凡夫が凡眼に写る現世の事象だけで不満を持つ人がいるのであります。成仏とは、【一切衆生平等成仏】【乃至法界平等利益】なのであります。

妙法蓮華経の法に叶っているかいないかであって、人々の評価では無いのであります。
　最高究極の乃至法界平等利益は【成仏】なのであります。全ての生命は【大海】で繋がって一つなのであります。

　大海から一滴のしずくとして掬い出され始まった生命。その生命は、実は過去永遠の因縁果の上に現れた生命であります。当然、永遠の過去からの善因、悪因の集積によって、大別すると、妙法蓮華経の法を信じる事の出来る【其罪畢己≪過去に犯した其の罪をおえ已って成仏する≫】か、妙法蓮華経の法を信じる事の出来ない【畢是罪己《現在犯している是の罪おえ已って成仏する》】か、【不聞三寶名】の、信、不信を感じる事の出来ない衆生とに分かれます。常不軽菩薩の様な【其罪畢己】の機根は、一切衆生に対して、法華経の行者として、他の生命に妙法蓮華経の法を縁せしめる事によって、過去の妙法蓮華経の法への不信と謗法の罪障消滅をし、成仏を遂げます。四衆の様な【畢是罪己】の衆生は、妙法蓮華経の法への謗法の逆縁によって、地獄へ堕ち、その無間の苦しみの中から、生前の妙法蓮華経、聞法の縁を思い出し、妙法蓮華経の法の真実と、妙法蓮華経の行者として生きる大切さに気付きます。
　【聖書】に於ける地獄は、堕ちたらおしまいの悪人の牢屋との考えですが、仏教の地獄は、提婆達多の逸話で分かるように、苦界であっても、妙法蓮華経の法が真実の法である事に、苦しみを通して、気付き、目覚める、妙法蓮華経に謗法した謗法者は、謗法をした縁によって、謗者復活が出来る修行の場所なのであります。つまり、十界互具中の地獄界なのであります。地獄という場所が有るのでなく、地獄という心、生き方の【界（さかいめ）】心理を示しているのであります。
　即身成仏とは、即座、刹那、同時、今有る身のままで成仏という事、今信の志を立てる場所自体が霊鷲山という事、今この時に生きているまま成仏という事であります。という事は、逆の不成仏とは、即ではないという事であります。
　今有る身が亡くなって、三途の川を渡り、閻魔法王の裁きを受けて、やがて仏になるか、地獄に堕ちるか。念仏信仰者は、西方極楽浄土へ行くか、地獄に堕ちるか。薬師如来を本尊とする信仰者は、亡くなって、薬師如来の東方浄瑠璃世界へ行くか、地獄に堕ちるか。大日如来を本尊とする真言宗の信者は、亡くなって、大日如来の国土へ行くか、地獄に堕ちるか。等々であります。
　しかし、どれも手順、道程があり、時間がかかり【即身成仏】ではありませんし、それぞ

れの阿弥陀如来、薬師如来、大日如来の国土へ行っても、その後どうして成仏し、その【成仏の姿】がどういうものなのかは、これらの経典に全く説かれていない為、分からないのであります。という事は、キリスト教の様に、天国へ行っても、神の下僕である事には変わりなく、只々救って下さい、助けて下さい、守って下さいと、縋り付いて生きるしかない、そんなものを【愛】と言っているのであります。これでは同じ道を迷いながら堂々巡りする六道輪廻と何ら変わらない事になります。

【即身成仏】の反対が【歴劫成仏】【灰身滅智の成仏】ならば、【即身成仏】の反対には【即身地獄】が有るという事であります。【生きて仏、死して仏】の反対には【生きて地獄、死して地獄】が、当然表裏として有るという事なのであります。

ここで、今まで述べてきた事を整理し、【成仏の姿】を箇条にして概略を示したいと思います。

◇【霊鷲山】【霊山】【霊山浄土】【霊山一会厳然未散】【霊山往詣】【本生譚】【輪廻転生】【死後の国】等々は、全て可視化し、【即身成仏】【一歩も往かずして霊山】へ導く為の方便の教え、【宝塔涌現】【地涌の菩薩が地より涌出】も、あくまでも法華経信仰者の心象風景であります。実際には荒唐無稽な内容であります。その物語の構成展開で、一切衆生に何を伝えようとしているのかを推察しなければいけないのであります。成仏のシンボルである【霊鷲山】に於いても同様であります。

◇森羅万象の個々の生命は、永遠の過去から、善因善果、悪因悪果の縁によって、全ての生命が繋がった大海より、一滴掬い出され生まれて来る。

◇個々の生命の生老病死の人生が終わり、永遠常住の故郷である大海へ戻り即身、即座、刹那に溶け込む。

◇南無妙法蓮華経の法を信じ、法華経の行者として生きた者の生命は、即座に大海全体に溶け込む。不信謗法の生命は、水と油の様に、又、2011年東日本大震災に伴い起きた、福島第一原発臨界事故によって、原発は破壊され核燃料棒は溶け落ち、燃料デブリを冷やし続けなければいけない水、地下水は汚染水となり、2023年段階で123万トン汚染水は毎日400トン1体1000トンのタンクを2日に一体作っていかなければならない状態で、現在1300個のタンクがあります。自然の中から循環出来ない、大海に溶け込んでいかない濃縮ウランを作り出し、その処理方法も無いまま、水で薄めて、海洋放出するとの計画ですが、この

現実も、人間の傲慢から、循環出来ない矛盾で、自らの首を絞め、生命を失い、家族を失い、友を失い、故郷を失い、人生を失い、地獄の苦しみを与えているのであります。自然にこの妙法蓮華経の大海に溶け込んで行かない。自分の考えが一番正しく、自分を中心に世界が廻っていると考えて生きている、二 乗、一闡提、不信謗法の生命が、妙法蓮華経の法を信じ受け入れなければ、大海も当然受け入れられないのであります。これが無間地獄の苦しみ【畢是罪已】として、心身に苦しみを受ける。しかし、生前微かでも妙法蓮華経の法に縁した生命は、徐々に妙法蓮華経の大海に溶け込み、【其罪畢已】の生命へと移って行く。溶け込んだ生命は、【輪廻転生】ではなく、大海の中の他の地水火風空の五大と結ばれ、蘇生された生命となって生まれるのであります。

◇人格、理性、道徳、五戒遵法、国家の法律遵法等々は人間が社会を成して生活して行く上で大切ですが、それ等では成仏出来ない。

◇正しい信心をしているのだから、みんなから愛され、感謝され、賞賛され、苦しみ、悲しみ、痛み、辛さ等々無く、人生順風満帆で、経済も家庭も子や孫も健康で、無事故で、成績も人並み以上で、人格、道徳心に優れ、法灯相続にも問題無しが当然だという訳にはいかないのであります。

◇日蓮大聖人が、龍ノ口処刑場での法難を成道の所と言い、佐渡流罪を法悦、今生の小苦と言い、身延での過酷な生活環境を霊山浄土と言われたけれども、本音は、苦しい、怖い、憎い、悔しい、辛い、悲しい等々の心を持ちながら、負け惜しみで言っているのではないか、本仏日蓮大聖人だから弱音は言えない。凡夫は、日蓮大聖人が体験された様な事柄が、自分の身に起これば、何故信心しているのにという、愚痴が出て、不幸な罰、過去の宿業と考えるのであります。日蓮大聖人も、私達と同じ生命ですから、苦しい、怖い、憎い、辛い、悲しい等々の感情は同じであります。ただ私達凡夫と違う点は、一切衆生平等成仏の法を一切衆生に説き伝える使命感と責任感が、何にも勝り抱き続けていたという事であります。それ故成仏する為に生まれて来て、成仏する事が一番の幸せであると心に定め、龍ノ口処刑場、佐渡、身延は、霊鷲山と感じ、成仏とは、こういうものであると表明されたのであります。

日蓮大聖人の身に起こった事も、凡夫の私達の身に起こる事も、法華経の行者として同じ事なのであります。

◇【我深く汝等を敬う、敢えて軽慢せず。所以は如何、汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏

する事を得べしと】は、末法の法華経の行者としての生き方、法華経の流布下種折伏、妙法蓮華経に縁を結ぶ姿、【成仏】の全てを表現しています。そして、この内容こそが、【南無妙法蓮華経】の中味【一切衆生平等成仏】なのであります。【菩薩の道を行じて当に作仏する事を得べしと】南無妙法蓮華経の法華経の行者として生きる事によって、南無妙法蓮華経の仏となる。法華経の行者として生きる姿が、そのまま仏なのであり、その身の有る所、そのまま霊鷲山なのであります。

◇生きている生命には下種流布折伏し、南無妙法蓮華経の法に縁せしめる。亡くなって大海に戻った生命には、その生命を通じて大海の一切の生命に、南無妙法蓮華経の追善供養をし、南無妙法蓮華経の法に縁せしめ、成仏を遂げられる様に、成仏の道へ導くのであります。

◇亡くなった人々、亡くなった森羅万象全ての生命は、永遠の過去、現在、永遠の未来の三世俱時の今現在、私達の生命と共に地水火風空の量子の生命と溶け合って、一緒に生き続けているのであります。天から見守っているのでも、仏の国、死者の国から見守っているのでなく、私達と同時、同所、時空を超越した、三世俱時に一緒に、支え支えられ合って生きているのであります。

◇南無妙法蓮華経の法は、過去・現在・未来、三世俱時の法であり、古いも新しいも無いのであります。例えば、1＋1＝２の公理には、時空を超えて、古い1＋1＝2、新しい1＋1＝2などというものは無いのであります。イギリスでも、インドでも、ロシアでも、スエーデンでも、ドイツでも、どの場所でも、過去、現在、未来の時間にも限定制約されること無くどんな存在、どんな生命にも絶対平等に1＋1＝2なのであります。南無妙法蓮華経は、この道理と同じ、全ての生命の基軸公理となる、時空を超えた常住の法なのであります。

【一切衆生平等成仏】イコール【広宣流布】であります。

どれだけ多くの人が現世利益で騙されたり、つられたり、脅されたり、強制されたりして、御受戒を受けて、入信したと思い込んでいても、それは妙法蓮華経の法の下種、結縁、入信ではないのであります。どれだけ南無妙法蓮華経の御題目を何百万遍と唱えても、「功徳を下さい。功徳を下さい。」と、現世利益目的の為に、どれ程南無妙法蓮華経と唱えたとしても、現世利益の為の呪文であって、己心に南無妙法蓮華経の仏性を自覚する、妙法蓮華経の下種結縁には決してならないのであります。

キリスト教の様に、キリスト教文化として、国、民族を挙げて、先祖代々、歴史、文化、

風俗、として、原罪を持った罪人の自覚を持って生きるという、生活自体が信仰となっている民族信仰、習慣信仰も、本当の信仰ではないのであります。

日蓮大聖人の法を信じるという事は、一人一人の心に立てる信心の事であります。国や、民族、組織団体で立てる信心は、組織拡大、組織結束、相互監視であって、食材、衣料等々の生活の端々迄規制され、それを守る者が篤信であり、破る者は裏切り者と烙印が押され、組織制裁リンチを産み、法律や社会の守らなければいけないルールよりも、組織内の裁きが絶対的に正しいとされ優先実行されるのであります。組織内の人々は、熱心に信仰していると思い込んでいますが、世間から見れば、狂信的に取り憑かれ、洗脳マインドコントロールされ、自分を殺し、自分達の世界が宇宙の中心で、自分達の世界が世界を征服すれば、絶対的平和が完成するという覇権主義的順縁広布の信仰観を抱いている為に、世の中を正しく良くしたいと言いながら、世の中から分離孤立し違和感を持って見られるのであります。自分の心を殺し、人々の心を殺し、組織に随う人間を作る事は、信仰では無いのであります。「ゆりかごから墓場まで」組織以外の人間関係を持たなくても生きていける様な構造を作りあげ、組織外の声は全て間違った考えであるという人間だけの組織になって、依経である原典の内容よりも、中心となるカリスマ指導者の言動と教義解釈が、最優先、最善であると、マインドコントロールされた人々の集団組織になって行くのであります。まさしく創価学会は組織至上主義の団体なのであります。組織に不都合ならば、日蓮大聖人の法を曲げても平気なのであります。それは、大石寺も同様なのであります。しかし、その様な組織団体は信仰ではないのであります。真実の信仰は、法が中心であり、カリスマは不必要なのであります。征服、覇権の考え方を持つ信仰は、必ず【順縁広布】を目的とするのであります。この世の中には、十界互具の逆縁の凡夫しかいないのでありますから、【逆縁広布】しかない世の中で、【順縁広布】を目指すことは、独善、排他、暴力を産み、犯罪を産み、生命の尊厳を否定し、洗脳されたイエスマンロボットだけの集団形成になって行くのであります。

日蓮大聖人の時代は、武力によって覇権が争奪され、承久3年【承久の乱】によって、平家傀儡の朝廷は倒され、源氏によって鎌倉幕府が立てられ、武士権力（軍事政権）が、国主となったのであります。

日蓮大聖人は、文応元年7月16日【立正安国論】を最明寺入道（北条時頼）に差し出します。正式な公認天下人は、6代執権北条長時であるにもかかわらず、先代5代執権時頼が、実質国の実権を握り、天下を動かしている本人に、公式文書でなく、私信となっても【立正安国論】を【国家諫暁】として送るのであります。日蓮大聖人の考える国主天下人は、実際に

天下を動かしている人物なのであります。名前だけの天下人は天下人では無いのであります。世の中をなんとしても現実に法華経の世に向かう様に寸分でも変えたかったのであります。ですから、御遺文の中で、天皇復活、王政復興等という考え方は、全く無いのであります。実際に天下を動かしている天下人を折伏し、天下の人々の謗法を改めさせ、法華一乗の国にしたいという目的だけなのであります。　日蓮大聖人が生涯に渡って随身した【貞観政要】も、権力者が民衆を、力で無く徳をもって導くという、主権在民の政治のあり方を理想としているのであります。権力者に都合の良い法でなく、全ての人々に平等であるべき法を根本として、世の中は治められなければいけないという思想が貫かれた内容であります。

鎌倉時代には、政治形態の多様性の知識は、権力者にも民衆にも無かったし、政治形態を選ぶ自由も権利も、当然民衆には無かったのであります。今、私達が知っている世界各国の多様な政治形態を、日蓮大聖人は、本仏といえども知らなかったのであります。

総理大臣、安倍晋三、岸田文雄という、国を動かす最高権力者、この国主を間接選挙で選ぶ等という非常識な事は、鎌倉時代には、誰一人考え、求める事など想像もしていなかったのであります。

もし、北条時頼が日蓮大聖人の法を信じ、禅宗の信仰を捨て、鶴岡八幡宮を取り壊し、日蓮大聖人の本尊を安置する本堂を建立し、国民に強制的に信仰させたとして、それが広宣流布でしょうか。権力者から強制された信心が、信心でしょうか。時頼が亡くなり、国主が交代した時、その国主が信じる宗教に全面的に切り替えます。国主が変わる度に国教が変わる。それを広宣流布と言えるのでしょうか。それが信心と言えるでしょうか。国主が変わろうが、迫害が有ろうが、少数であろうが、どんな時代の変化が有ろうが、法華経の法に叶い真心から貫かれる信心こそが本当の信心であり、その信心が伝わって行くのが、正法流布、広宣流布であります。鎌倉時代の政治機構と全く条件の違う時代になっても、無理矢理に会通しようとし、【国立戒壇堂建立】【不開門】【国民投票】【国会の三分の二の賛成議決】と、教条主義的に主張するのであります。しかし、鎌倉時代には【国民投票】【国会の三分の二の賛成議決】は、無いのであります。会通出来ないならば、法華経の原点に立ち返って考え直さなければいけないのであります。

広宣流布の暁に、人々の体勢を見て、天皇はじめ皇室の面々が、実は私も日蓮大聖人の法を信じていたんだと、入信する事が、はたして信仰者の姿だろうか、天皇も皇室の面々も、法律に基づく、【信仰の自由】が保証されているのだから、現在の段階で、一人の凡夫として、日蓮大聖人の法を信じ、信仰しなければいけないはずであります。もし、天皇や皇室の

面々が日蓮大聖人の法を信仰するなら、それにあやかって、私も信仰しようという人々がいたとしても、それは信仰ではないのであります。天皇も皇室の面々も、特別で無く、誰もが全て十界互具の凡夫なのであります。天皇から、勅撰を頂くような信仰ではないのであります。

信仰とは、一人一人なのであります。十界互具の凡夫を大前提にしている、【行道不行道】の不信、謗法者の存在を認めている法華経ですから、当然【順縁広布】は無く、【逆縁広布】しか無いのであります。全ての生命は、十界互具の逆縁であり、【逆縁の広宣流布】【逆縁の成仏】しか無いのであります。【逆縁の広宣流布】こそが、【大地を的とすべし】の【広宣流布】なのであります。これならば出来る、これならば法華経の行者として生涯の永遠常住の目標として精進しなければいけないのであり、その過程、道程に【一切衆生平等成仏】が叶って行くのであります。

全ての生命が幸福にならなければ、自分個人の【本当の幸福】は有り得ないのであります。弱者を脅したり、搾取したり、差別したり、原子爆弾を持っているか否かの圧倒的軍事力をちらつかせたり、強大な経済力で圧倒したり等々で均衡を図ろうとする所には、【脅し】【従属】が有るだけで、【平和】は無いのであります。キリスト教文化の中で、どれ程【自由】【平等】【愛】を訴え、求めても、【聖書】に、その事が説かれていない以上、それらを求める事は出来ないのであります。その事は現代に至るまでの世界の歴史で証明されているのであります。法華経の【一切衆生平等成仏の法】法華経には、真実の【自由】【平等】【慈悲】【成仏】が説かれています。南無妙法蓮華経の信の志を立てる即身刹那【時・空】即ち、山も霊山浄土、谷も霊山浄土、曠野も霊山浄土、何処も彼処も、過去、現在、未来の時間を超越して、霊山浄土なのであります。

【守護国家論】（全72ｐ）

法華経修行の者の所住の処を浄土と思うべし。何ぞ煩わしく他所を求めんや。

これこそが、【成仏の姿】なのであります。

最後まで読んで頂いて、やはり【成仏の姿】とは、何だそんな事なのかと、がっかりされたでしょうか？

私は、この文章を書いて、今まで整理出来ないでモヤモヤしていた成仏とは何かの思いが整理され、書く以前よりも、読経唱題する、その場を霊鷲山と考え、御経、御題目を読み聞き、信心の志を深く感じることが出来るようになり、ありがたく感じています。

御本尊に向かって、御経や御題目を唱える事を不思議と思いませんか。

法華経は、釈迦如来が霊鷲山で、参集した一切の衆生をはじめとして、地涌の菩薩に説いた法であります。その法華経を何故、御本尊に向かって唱えるのでしょうか。【釈迦に説法】という諺がありますが、まさしく、その通りの事をしているのであります。釈迦如来が衆生に説いた法華経を、信仰者である私達が【本尊（仏）】に向かって唱え返す。【自我得仏来（我仏を得てよりこのかた）】と、大声で言い返す姿は、親や先生から、「嘘をついてはいけないぞ」と言われ、それをそのまま、親や先生に、鸚鵡返しに「嘘をついてはいけないぞ」と言うのと同じであります。親や先生は、おちょくっているのかと思い、当然怒るでしょう。読経唱題は何故、この様な事をするのでしょうか。

つまり、読経唱題は、法華経説法の場面を再現しているから、この様な矛盾した設定が修行として当然の姿になっているのであります。

自分の身体を使って、仏が説法した法を読む。読んだ声は自分の声ですが、耳に入り心に達する時には、仏の声であります。つまり、毎日の朝夕、仏の霊鷲山での法華経説法の場に諸仏諸菩薩と共に参集して聴聞し、自らに妙法蓮華経の仏性が有る事を言い聞かせ、目覚める為に行っているのであります。ですから、朝夕の勤行は、読むというより、聞法（心に届ける）という意識心構えに立った読経唱題なのであります。勿論、声帯の病により声を出す事が出来ない人は、心に読経唱題を念ずるだけで、同様に法華経の霊鷲山での説法を聴聞し、法華経の法に触れ、自らに言い聞かせる事が出来るのであります。つまり、読む事が出来ない人も、耳が聞こえない人でも聞法は出来るのであります。

テレビを見ながら、ラジオを聞きながら、携帯電話をいじりながらでも、南無妙法蓮華経の御題目は唱えることが出来ます。しかし、それは、南無妙法蓮華経の心ではありませんから、南無妙法蓮華経ではないのであります。

三大秘法（題目・本尊・戒壇）に重ねれば、霊鷲山は信心修行の場所【戒壇】であります。【受持即観心】【受持即持戒】が成仏なのであります。

【戒壇】は、限定された、戒壇本尊の安置された場所、国立戒壇建立の天母ヶ原とかでは無く、信心の志を立てたる、山谷曠野、如何なる所も戒壇であり、成仏の【霊鷲山】であり、法華経の行者の己心に存在するものであります。【題目（法）】は平等で、【本尊】と【戒壇】には順位、差異が有るという考え方は、法門と言うには破綻し狂っているのであります。【題目】が一切衆生に平等ならば、【本尊】も【戒壇】も平等なのであります。

【戒壇】は、国会で議論して、多数決で成立させ、国の税金で建てる物、建てられる物ではないのであります。多数決という事は、広宣流布ではないという事を証明しているのであります。

【題目】が一閻浮提総与平等ならば、【本尊】も、一閻浮提総与【戒壇】も、一閻浮提総与、当然三大秘法は絶対の平等なのであります。

【戒壇】とは、信心修行の場所、受戒の場所であります。法華経の題目を本尊とし、その本尊に向かい信心修行する道場。題目→本尊→戒壇が三大秘法の成り立ちであります。戒壇→本尊→題目という順序は有り得ないのであります。

【戒壇の本尊】とは、国立戒壇堂を建立した暁に、その戒壇堂に安置する本尊という意味でしかありません。逆に言えば、この本尊しか安置してはならないという表現であります。三大秘法の【戒壇】は、山谷曠野、何時如何なる時所でも、妙法蓮華経の但行礼拝の信を立てたる所、妙法蓮華経の信行を尽くす全ての場が【戒壇】という意味で有ります。つまり、【戒壇の本尊】の【戒壇】は、三大秘法の【戒壇】を意味した【戒壇】では無いのであります。

何を唱えているのか分からない早口、ベテランぶった崩れの勤行、朝五座・夕三座の勤行が長いので、とにかく速く読んで終わらせなければならないからと言う考えの人が沢山います。勤行をやった、終わった、という、仕事感、義務感、満足感を得る為に勤行しているのでは無いのであります。方便品、壽量品、南無妙法蓮華経の一語一語を読経唱題、聞法し己心に届けて行く。それが勤行の法悦なのであります。一語一語分かるようなスピードでやっていたら時間がかかってしかたないからという、自分達の都合を中心にしたら、それは本末転倒であります。そんなくだらない理由ならば、日蓮大聖人在世の時代の、方便品世雄偈を入れた一座の勤行を、誰が聞いても何を言っているのか分かるようなテンポで唱えるようにすれば良いのであります。御題目も、回数を稼ぐ、回数が多いほど功徳が貰えると間違った指導に洗脳され切った、早口の題目、此れ等を霊鷲山で仏の妙法蓮華経の説法を聞いている姿に置き換えた場とすると、早口、崩れで何を話しているか分からない説法が有るでしょうか、聞き取れるでしょうか、追いかけられるような早口の御題目、「なんみょーほーれんげーきょー」と聞こえない、「なべをほれ、なべをほれ」としか聞こえない、崩れた仏の声が有るだろうか、有るわけが無いのであります。日本語の素養の有る者にも分からない読み方では、世界中の日本語以外の言語文化の国々、民族の信仰者が唱和出来るはずが無いのであ

ります。まして崩し、崩れの勤行は、全て個々の自己流であります。崩れの勤行で100人200人の唱和は不可能なのであります。2人でも不可能であります。書道に崩しの【草書】がありますが、【草書】には崩しのルールがありますから、素養の有る人であれば誰でも読めます。しかし、崩れの勤行にはルールが無いわけですから、個々自己流のバラバラで、ベテランぶって、自己満足しているだけなのであります。

仏は出来る限り全ての衆生に分かり易く伝えたいと説いているので有ります。自己満足の、やればいいんでしょ、終わればいいんでしょの、やっつけ仕事の読経唱題では、何十年やろうとも霊鷲山での説法に縁する事は出来ないのであります。信じる者、信じない者、関心の無い者、子供でも、何を言っているのか判別出来る発音と速度でなければ、自ら妙法に縁し、他に縁せしめる事にならないのであります。

当然、朝夕の勤行以外の時空で、一遍の南無妙法蓮華経の御題目を信ずる志を立てて唱えるだけでも、そこは霊鷲山の説法の場なのであります。御本尊様の相貌は、宝塔で二仏並坐し、当然、二仏が中心では無く、二仏が説く南無妙法蓮華経の法を中心根源として二仏は南無妙法蓮華経の脇士として示された、霊鷲山での南無妙法蓮華経の説法の姿を顕わしているのであります。

朝夕、勤行修行する事は、この霊鷲山に昼夜往復し参加する事を表し、常に妙法蓮華経の説法に縁し、忘れたら思い出し、迷い外れたら、元に戻り、自分に何度も何度も妙法蓮華経に南無する事を言い聞かせるのであります。朝夕の勤行以外の時にも、信心の志を抱く即身刹那には、自分の己心に妙法蓮華経の仏性を感じ、何時でも、何処でも、法華経の行者として生きる、山谷曠野いかなる時空も、身も心も霊山浄土、霊鷲山なのであります。霊鷲山は、法華経以外の教えが説き描き、それを鵜呑みにした世間の人々が求め描く快楽安息の地では無いのであります。生まれ変わり、死に変わり、新しい一滴の生命を受けても、同じ事を永続して行く、それが法華経の行者の【成仏の姿】なのであります。

2023/07/12